

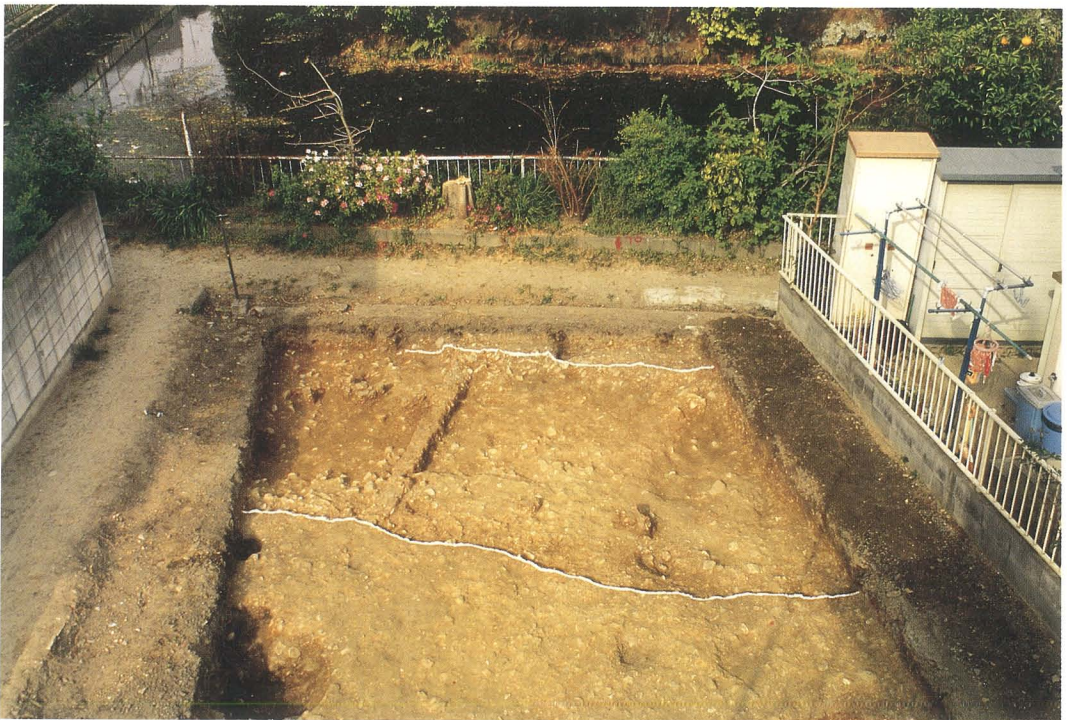
伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅲ

1994年3月

伊丹市教育委員会



伊丹廃寺跡第37次調査全景 南より(北側は東方基壇跡である)



御願塚古墳第5次調査全景 西より(東側は前方部と周濠である)

序文

本書は、伊丹市教育委員会が個人住宅の建設に伴う発掘調査のうち、伊丹廃寺跡・緑ヶ丘遺跡・御願塚古墳で行った、埋蔵文化財調査報告書で国庫補助金を受けてまとめたものです。

伊丹の地は、伊丹台地と武庫川・猪名川によって形成された沖積平野からなっています。

伊丹台地の中央には、奈良時代の寺院跡である伊丹廃寺跡が、南縁には中期古墳の御願塚古墳があります。特に、東縁には、わが国城郭史上はじめての惣構をもつ城として知られている荒木村重の居城、有岡城などの貴重な遺跡が多数存在しています。

今回の発掘調査により、伊丹廃寺跡からは築地と築地の外側の雨落ち溝を検出し、緑ヶ丘遺跡では波状文縁複弁花文軒丸瓦が出土し、御願塚古墳は、既に発見されている二重の周濠が確認され埴輪も出土しております。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位の皆さまに心よりお礼申し上げます。

平成6年3月

伊丹市教育委員会

教育長 乾 一雄

例 言

- (1) 本書は兵庫県伊丹市に所在する伊丹廃寺跡・緑ヶ丘遺跡・御願塚古墳の発掘調査成果をまとめたものである。
- (2) 発掘調査は、国庫補助事業として、伊丹市教育委員会が実施した。
- (3) 各発掘調査の期間は、次のとおりである。
- | | |
|-------------|-------------------|
| 伊丹廃寺跡第36次調査 | 昭和63年2月12日～2月26日 |
| 伊丹廃寺跡第37次調査 | 平成3年11月14日～11月30日 |
| 緑ヶ丘遺跡第5次調査 | 平成4年11月24日～12月3日 |
| 御願塚古墳第5次調査 | 平成5年4月22日～4月29日 |
- (4) 各発掘調査の担当者は次のとおりである。
- | | |
|-------------|---------------------------|
| 伊丹廃寺跡第36次調査 | 小長谷正治、橋本正幸が担当した。 |
| 伊丹廃寺跡第37次調査 | 小長谷正治、細川佳子が担当した。 |
| 緑ヶ丘遺跡第5次調査 | 小長谷正治が担当し、伊藤秀樹、岡野理奈が補佐した。 |
| 御願塚古墳第5次調査 | 小長谷正治が担当し、伊藤秀樹が補佐した。 |
- (5) 伊丹市教育委員会事務局
平成5年度
- | | |
|----------|-------|
| 教 育 長 | 乾 一雄 |
| 教 育 次 長 | 原 田 實 |
| 生涯学習部 部長 | 保地之忠 |
| 〃 次 長 | 宮崎泰樹 |
| 〃 主 幹 | 大 田 迪 |
| 〃 主 査 | 大賀興宣 |
| 〃 主 任 | 小長谷正治 |
| 〃 事務員 | 柄谷智子 |
| 〃 嘱 託 | 細川佳子 |
- (6) 整理作業は平成6年1月から3月まで実施した。遺物の実測、拓本、トレースなどの作業は、三輪隆子、岡野理奈、丸岡タカミ、徳永悦子が行った。
- (7) 本書の執筆は、遺構を小長谷正治、その他を細川佳子が行った。
- (8) 本書所載の資料は、伊丹市教育委員会にて保管している。
- (9) 遺物写真中の()内の数字は遺物実測図の番号のことである。

目 次

I 遺跡の概要	1
II 調査の概要	3
III 伊丹廃寺跡第36次調査	5
IV 伊丹廃寺跡第37次調査	13
V 緑ヶ丘遺跡第5次調査	19
VI 御願塚古墳第5次調査	23
VII まとめ	29

付図

I. 遺跡の概要

位置と環境 伊丹廃寺跡・緑ヶ丘遺跡・御願塚古墳の所在する伊丹市は、兵庫県の東南部に位置する。市域は、西摂平野のほぼ中央で、南流する武庫川と猪名川の間を北の長尾山地から延びる伊丹台地(洪積台地)と猪名川左岸の沖積地に分かれる。標高は猪名川左岸の沖積地の低地帯を除いて40mから5mとなり、北から南に向かってしだいに下りていく。

市内の遺跡 伊丹市の歴史は縄文時代に始まる。縄文時代の遺跡は猪名川左岸に多く、大阪空港遺跡A地点では中期、B地点では後期の土器、口酒井遺跡では晩期の土偶や靱痕のある浅鉢などの土器が発見された。また、伊丹台地上の緑ヶ丘遺跡(2次)では後期の石器、有岡城跡(11次・17次)では中期から後期の土器が土坑の中から検出された。

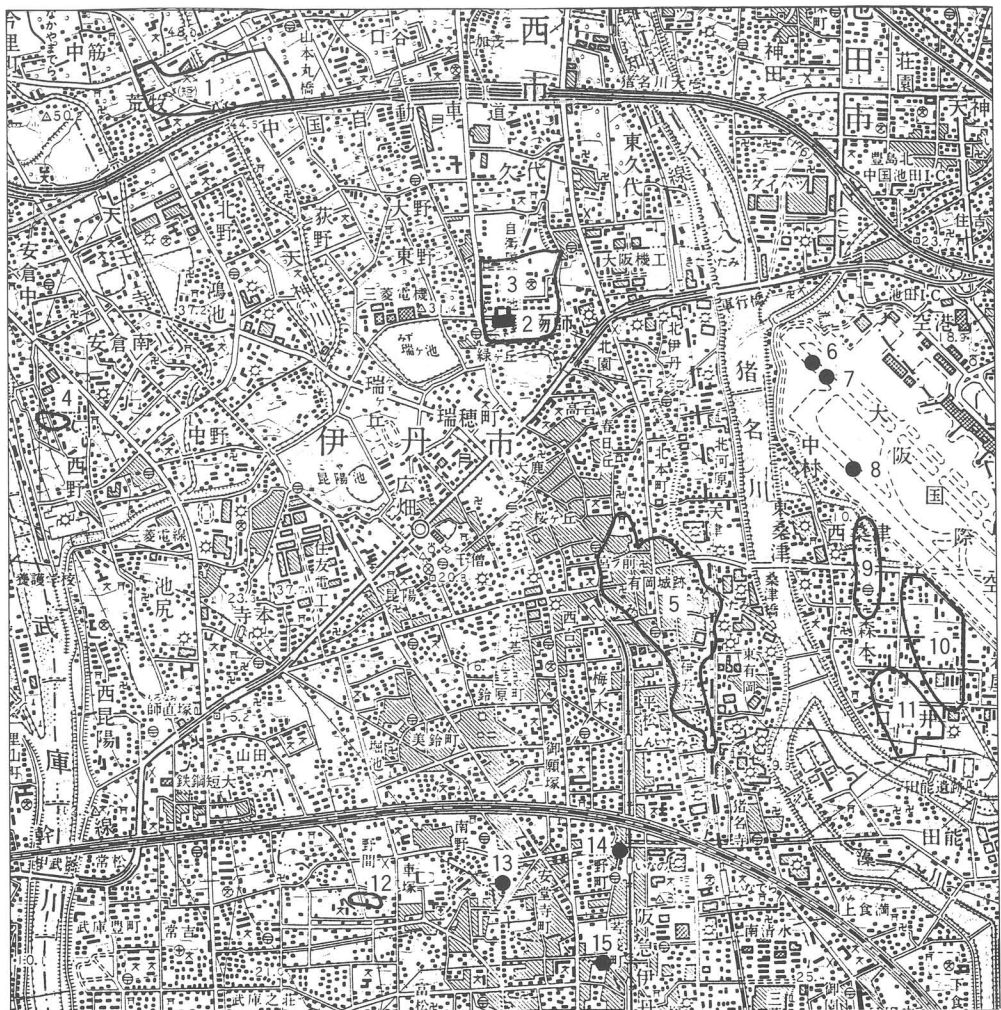
弥生時代の遺跡も猪名川左岸に多い。口酒井遺跡は中期から後期の集落跡で、住居跡や円形・方形周溝墓、壺棺墓、木棺墓などが発見された。また、中村遺跡では昭和13年の空港建設中に銅鐸が発見された。一方、猪名川右岸では伊丹台地東縁部の有岡城跡(65次・66次)でも僅かにみられるが、最近の調査により、市域の最も北側に位置する荒牧遺跡、南西端の野間森本遺跡、台地の西端に位置する西野遺跡が中期から後期の集落跡であることがわかってきた。

古墳時代前期には西桑津遺跡が集落跡として確認されている。中期古墳は猪名野古墳群の御願塚古墳や柏木古墳が残っている。御願塚古墳は伊丹市御願塚4丁目に所在し、伊丹台地の南縁に位置する。古墳は5世紀代の帆立貝式の前方後円墳で、墳丘の周囲には馬蹄形の周濠が巡っている。最近の発掘調査で二重目の周濠が発見された。二重目の周濠は神戸市の五色塚古墳に次ぎ兵庫県内で2例目の発見である。近年の発掘調査では有岡城跡内に上臈塚古墳(20次)や鶴塚古墳(73次)の存在が明らかになった。消滅したが緑ヶ丘古墳群は後期に入る。

奈良時代から平安時代の遺跡は、伊丹廃寺跡とその周辺(緑ヶ丘遺跡)に存在する。伊丹廃寺跡は伊丹市緑ヶ丘4丁目に所在する。この場所は伊丹台地東縁部にあたり、標高は30mである。昭和33年、耕作中に水煙・風鐸が発見されたことから、その後甲陽史学会により発掘調査が行われた。その結果、

東に金堂跡、西に塔跡、その周囲を廻廊跡が巡る法隆寺式伽藍配置をもつ古代寺院跡であることがわかった。昭和41年国の史跡指定を受け、史跡公園として整備されている。伊丹廃寺跡周辺に広がる緑ヶ丘遺跡は縄文時代から中世までの幅広い時代の遺跡である。これまでの発掘調査(2～4次)で、奈良時代の大規模な掘立柱建物跡や伊丹廃寺跡と同じ瓦が出土したことから廃寺関連の施設があったと考えられる。また、有岡城跡(宮ノ前地区)や荒牧遺跡(12次)では掘立柱建物跡が検出され、森本遺跡では奈良時代の条里制の溝跡が発見された。

中世の有岡城(伊丹城)跡は、惣構構造を採用した城で、本丸跡がJ R伊丹駅付近に残っている。発掘調査により、堀跡・建物跡・庭園跡等が検出された。近世の伊丹郷町遺跡は有岡城跡と同じ範囲で、酒造施設や町家の遺構が検出された。



- | | | | | |
|----------|----------------|--------------|------------|-----------|
| 1. 荒牧遺跡 | 4. 西野遺跡 | 7. 大阪空港遺跡A地点 | 10. 森本遺跡 | 13. 平塚古墳 |
| 2. 伊丹廃寺跡 | 5. 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 | 8. 大阪空港遺跡B地点 | 11. 口酒井遺跡 | 14. 御願塚古墳 |
| 3. 緑ヶ丘遺跡 | 6. 中村遺跡 | 9. 西桑津遺跡 | 12. 野間森本遺跡 | 15. 柏木古墳 |

図1. 伊丹市内の主な遺跡 1/50,000(大阪西北部)

Ⅱ. 調査の概要

国庫補助事業による発掘調査

伊丹市が国庫補助事業として、個人住宅建設等に伴う発掘調査を始めたのは昭和61年度のことである。表1の発掘調査一覧は平成3年度以降平成5年度までのものである。平成2年度までの調査例は伊丹廃寺跡第36次調査を除いて、「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅰ」(伊丹市教育委員会1992年3月)に掲載している。国庫補助事業による発掘調査は年間3～6件の割合で実施し、これまでに32件を数える。このうち有岡城跡・伊丹郷町遺跡関係の調査は25件で大半を占める。この遺跡の範囲は、市域で最も早くから市街地化が進み、JR伊丹駅前や宮ノ前地区で大規模な再開発事業が行われている。このため、個人住宅の建替や共同住宅の建設が増加している。

このほかにも、これまでに伊丹廃寺跡2件、御願塚古墳3件、緑ヶ丘遺跡1件、昆陽寺境内遺跡1件の調査を実施している。

伊丹廃寺跡

伊丹廃寺跡では、昭和41年までに24次の調査が行われた。その結果、法隆寺式伽藍配置で奈良時代前期の寺院跡であることがわかった。(高井悌三郎他「撰津伊丹廃寺跡」1966年3月伊丹市教育委員会) 発掘調査は現在までに37次を数える。昭和62年度の第36次調査と平成3年度の第37次調査が国庫補助事業によるもので、伊丹廃寺跡中心伽藍の南東部、東築地跡にあたる。

緑ヶ丘遺跡

緑ヶ丘遺跡の発掘調査は、現在までに5次を数える。第2次～第4次調査は伊丹廃寺跡の北側で行った。第2次調査では縄文時代の石器が出土した。第2次～第4次調査では掘立柱建物跡が検出され、とくに第3次調査では、一辺1mの方形の掘方をもつ掘立柱建物跡が発見された。平成4年度の第5次調査は国庫補助事業によるもので、伊丹廃寺跡の東側にあたり、東築地跡から35mの距離にあたる。(付図参照)

御願塚古墳

御願塚古墳は、墳丘・周濠ともに残る中期の帆立貝式の前方後円墳として、昭和41年に兵庫県の史跡指定を受けた。昭和44年には環境整備事業に伴い、周濠の外側に沿って、トレンチが入れられた。これが第1次調査で、その結果、外堤部に埴輪が樹立されていた可能性があることがわかった。昭和62年に共同住宅建設に伴い、古墳の東側の外堤部で第2次調査を行い、二重目の周濠を発見した。その後、第3次～第5次調査は国庫補助事業によるもので古墳の東から北、西側でも二重目の周濠が巡っていることがわかった。

平成3年度

遺跡名	調査地点	調査期間	面積	調査概要
有岡城跡 第102次	宮ノ前1-91-9	平成3年6月25日 ～6月27日	16m ²	当地点からは有岡城期の遺物は全く出土せず、当時の城下町からは外れていたものと推定される。当地点が町屋となったのは、江戸時代中期以降と考えられる。
伊丹廃寺跡 第37次	緑ヶ丘4-41	平成3年11月14日 ～11月30日	35m ²	当地点は伊丹廃寺跡東側の築地推定地にあたる。築地と築地の外側の雨落ち溝を検出した。築地は削平が著しく、基底部のみ遺存していた。
御願塚古墳 第3次	御願塚4-345-2	平成4年1月20日 ～1月25日	37m ²	当地点は、御願塚古墳の東側で前回の2次調査の南隣に位置する。2次調査で発見した二重目の周濠の続きを確認できた。

平成4年度

遺跡名	調査地点	調査期間	面積	調査概要
有岡城跡 第108次	中央2-8-7	平成4年4月21日 ～4月24日	20m ²	当地点からは有岡城期の遺物は全く出土しなかった。検出した方形の焼土処理土坑は、このあたりいったいに被害がもたらされた江戸中期の火災跡と考えられる。
緑ヶ丘遺跡 第5次	緑ヶ丘4-38、39	平成4年11月24日 ～12月3日	87m ²	当地点は伊丹廃寺跡東築地の東方にあたるが、廃寺に関連する遺構は検出されなかった。土坑3から伊丹廃寺の波状文縁複弁花文軒丸瓦1点と平瓦が出土した。
御願塚古墳 第4次	御願塚4-345-9	平成4年12月11日 ～12月16日	26m ²	当地点は御願塚古墳の北側に位置する。検出した周濠は前回(古墳の東側)の調査と併せて考えると、御願塚古墳に二重の濠が巡っていたことが推定できる。
昆陽寺境内 遺跡	寺本2-167	平成5年1月22日 ～1月27日	28m ²	検出した柱穴や溝から15世紀代の遺物が出土した。その上層に広がっていた焼土や炭は、時代的にみて建物が織田信長の兵火にあって焼けた跡と考えられる。
有岡城跡 第118次	中央6-3-3	平成5年2月16日 ～2月22日	30m ²	当地点は有岡城惣構の要所の一つである上臈塚砦の推定地であるが、上臈塚砦跡と考えられる遺構は検出されなかった。江戸時代後期の遺物が出土した。

平成5年度

遺跡名	調査地点	調査期間	面積	調査概要
御願塚古墳 第5次	御願塚4-323-1	平成5年4月22日 ～4月29日	42m ²	当地点は御願塚古墳の西側に位置する。2～4次調査で発見した二重目の周濠が古墳の西側でも巡っていることが確認できた。須恵質の埴輪が出土した。
有岡城跡 第121次	中央3-398-1	平成5年6月3日 ～6月11日	90m ²	調査地点の北側の58次調査で発見した有岡城期の堀の延長部が当時点でも検出された。江戸時代中期の火災跡・井戸・土坑等が検出された。
有岡城跡 第128次	宮ノ前3-59-1	平成5年8月19日 ～8月21日	24m ²	検出した方形の焼土処理土坑は元禄時代の火災跡と考えられる。柱穴4基・土坑9基が検出され、そのうちの土坑より江戸時代前期の遺物が出土した。
有岡城跡 第132次	宮ノ前2-5-3	平成6年1月18日 ～1月28日	50m ²	当地点の北側の100次調査と同様に2度の火災跡を検出した。古い方の火災跡は、青花や瀬戸美濃焼天目碗等の遺物が出土したので、元禄期以前と考えられる。

表1. 平成3年度～平成5年度 発掘調査(国庫補助事業)一覧表

Ⅲ. 伊丹廃寺跡第36次調査

所在地 伊丹市緑ヶ丘4丁目41番地
調査面積 40m²
調査期間 昭和63年2月12日～同年2月26日

調査概要 調査地点は、国史跡伊丹廃寺跡の東築地の所在する場所で、現在まで民有地となっている。昭和62年7月土地所有者

より住宅の増築を理由に史跡の現状変更許可申請書が提出されたが、史跡に影響を及ぼさないよう建物の基礎を浅くすること、さらに事前に発掘調査を実施することなどを条件に許可されることになった。今回の発掘調査は、以上のように史跡の現状変更許可申請に関わる事前調査として実施したもので、本格的に廃寺跡の遺構の調査を目的としたものではない。従って、調査範囲は建物建設予定地を対象にし、東築地との関連を知るため一部西側に調査範囲を広げている。

これまでの調査によれば、調査対象範囲は東築地の外側に隣接すると考えられ、廃寺跡に関連する遺構は予想していなかった。しかし調査の結果、築地の外側に幅の広い溝状遺構が発見され、しかも内部から廃寺所用の瓦が多く出土するなど、この溝状遺構が廃寺に関連する可能性がでてきた。そのため調査は溝状遺構を中心に進めることになった。

遺構 今回の発掘調査で確認された遺構は、築地と築地の両側に延びる溝である。東側築

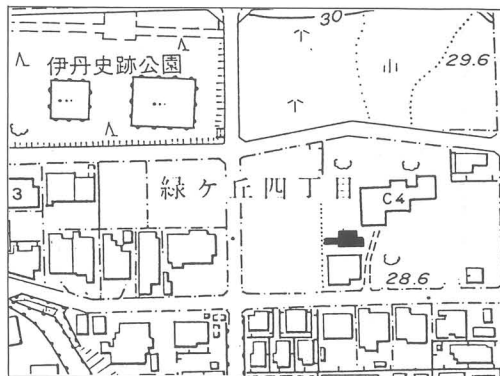


図2. 調査地点図 1/2,500



写真1. 調査区全景 (北より)

地は、これまでの伊丹廃寺跡の発掘調査では、第17次調査以降、第22次調査、第32次調査、第33次調査の4度に及ぶ発掘調査により総延長115mにわたり確認されている。今回の第36次調査地点はこの間にある。発掘調査の結果、当初の推定ライン上に築地跡を確認した。この地点での築地の規模は、基底部で4m、上端部で3、5mを測り、既に築地の盛り土などは削平されて地山が露出していた。築地の内側(西側)には、幅40～50cm、深さ10から20cmの雨落ち溝(溝1)、外側には幅4.8～5.8m、深さ10～20cmの広い溝(溝3)が検出された。溝3の外縁は直線ではなく多少入り組んでおり、築地と平行しないことから、築地と無関係の遺構かと考えられたが、溝3によって築地が壊されていないことや、溝3の埋土が溝1とが共通することなどから、築地と同じ時期の遺構であると判断される。但し、築地外側の幅広の溝は今回の調査範囲の北側で実施した第37次調査地点で終結している。この溝の性格などは明らかではないが、この調査地点より北方80mのところでも実施した第33次調査地点でも築地の外側に幅6.3～7.2mの幅広の溝が検出されており、この第33次調査検出の溝が今回検出した溝と同じものであるとすれば、東築地に当初から設けられていた施設であると考えられよう。しかし、西側及び北側の築地にはこの溝は付設されていないので、東築地の特徴とすることができる。

溝3の内部からは格子目叩きの平瓦や縄目叩きの平瓦などが出土した。

遺物 出土遺物の総量は遺物整理箱に2箱、瓦片130点、磚3点、須恵器片6点である。

1、2は磚で上面は撫で調整を施し、灰白色である。3は須恵器の長頸壺の頸部で陶紀編年のⅣ型式の1段階に相当する。4は須恵器甕の体部で内面は同心円叩き、外面は平行叩き調整である。5、6は丸瓦で、5は厚みが1.9cm、灰色で凹面に布目が残る。6は行基葺の丸瓦で両面に縦方向に篋撫でが施されている。厚みは1.7cm、淡黄灰色である。7～11は格子目叩きの平瓦である。格子目の一辺が1.5～1.8cmの菱形を成し、格子目の条線が5～9mm、厚みは2.0cmである。色調は7～10が灰褐色、11が灰色である。11を除いて凹面には布目が残るが、11は篋撫でで消してある。11の格子目は小さい方が0.7cm、大きい方が1.5～1.8cmで、大きい格子目の中に小さい格子目がある。格子目叩きの平瓦は、高井氏の分類(高井悌三郎他「撰津伊丹廃寺跡」伊丹市教育委員会1966年3月)によると、11を除いて伊丹廃寺所用の平瓦Ⅰに対応する。12～17は縄目叩きの平瓦である。12～16は縄目が5cmあたりに12～13条、厚みは2.0cm、焼成はあまく、淡黄色である。12、13の狭端部は斜めに切られ、12～15の側面は垂直に切られる。12・13・15は粘土紐の痕跡が残る。14、16は摩滅が著しい。17は縄目が細かく5cmあたりに25条、厚みは2.0cm、灰色である。凹面は篋撫でで、端部はまっすぐに切られている。17の縄目叩きの平瓦は高井氏の分類によると平瓦Ⅶに対応する。7、17以外は溝3より出土した。

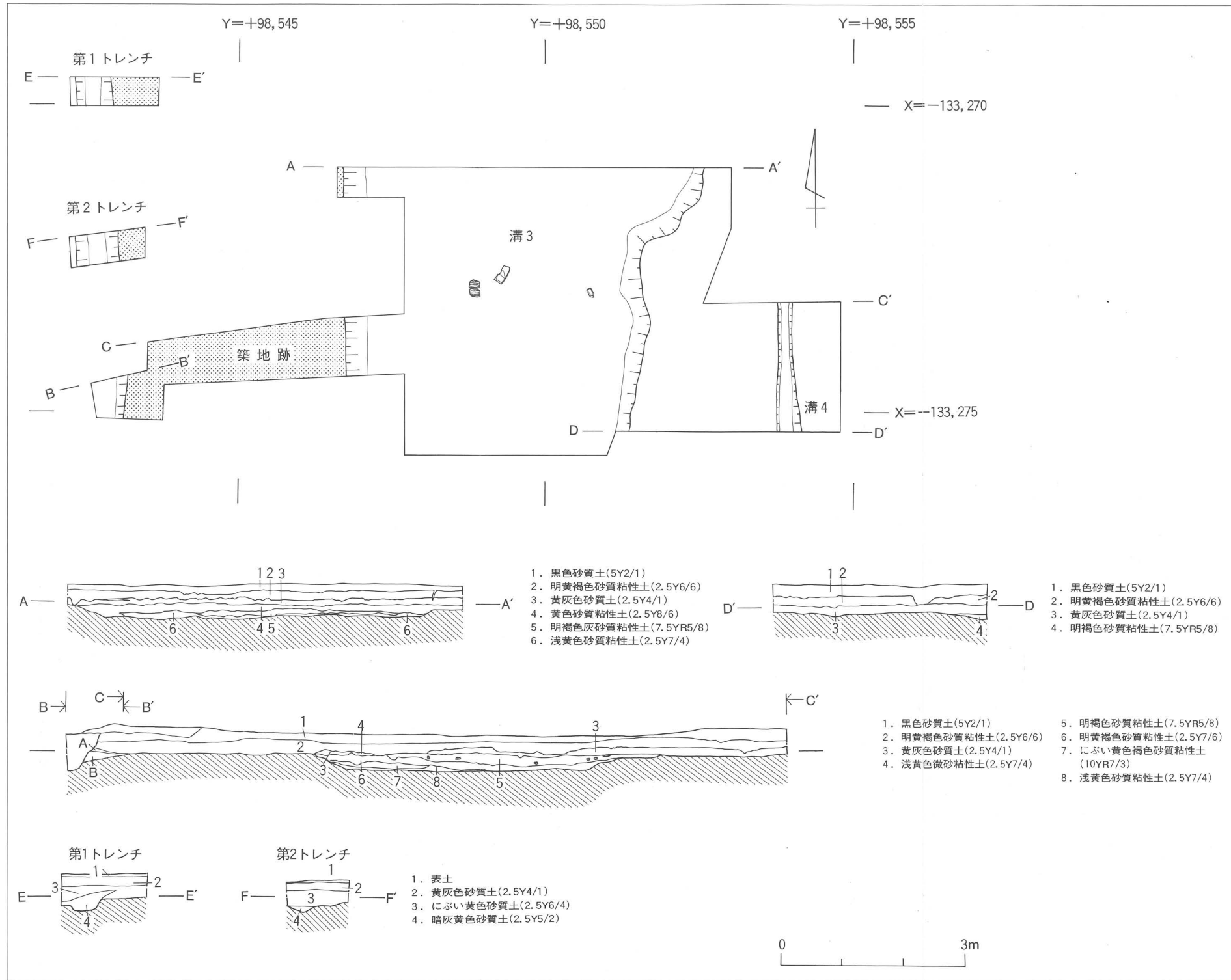


図3. 伊丹廃寺跡第36次調査実測図

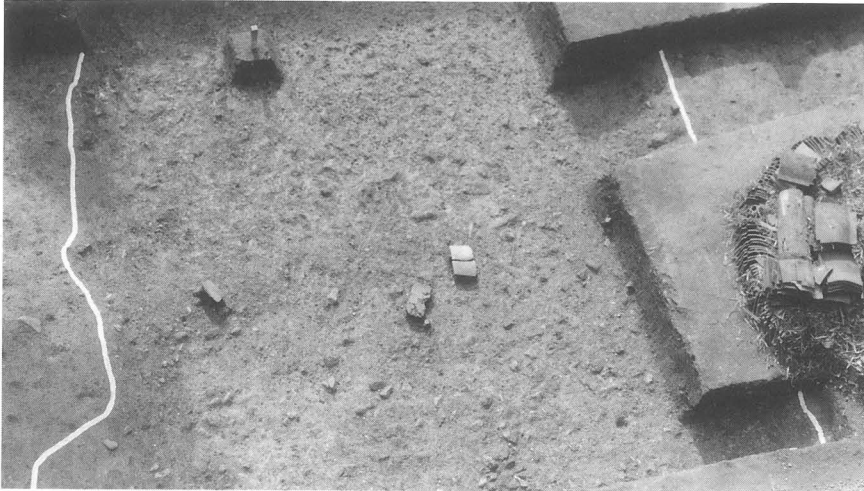


写真2.
溝3検出状況
(北より)



写真3.
遺物出土状況
(西より)

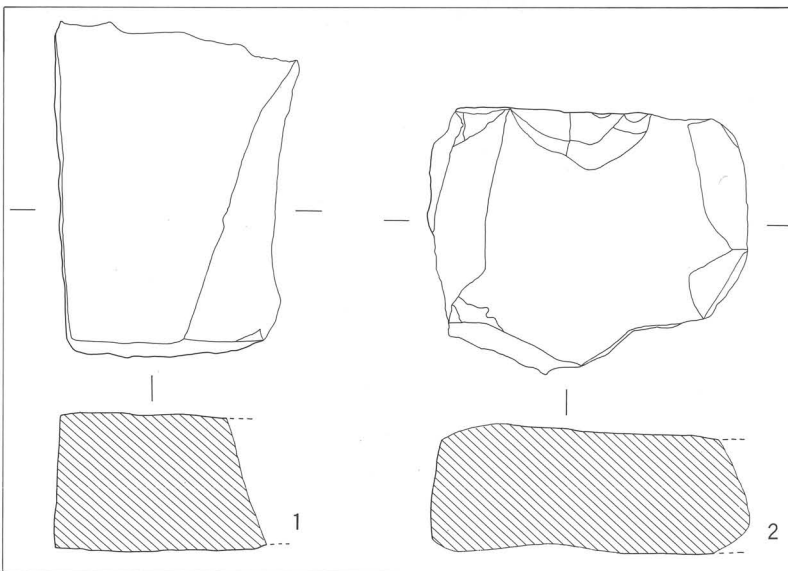


図4.
出土遺物実測図
(1)(1/3)

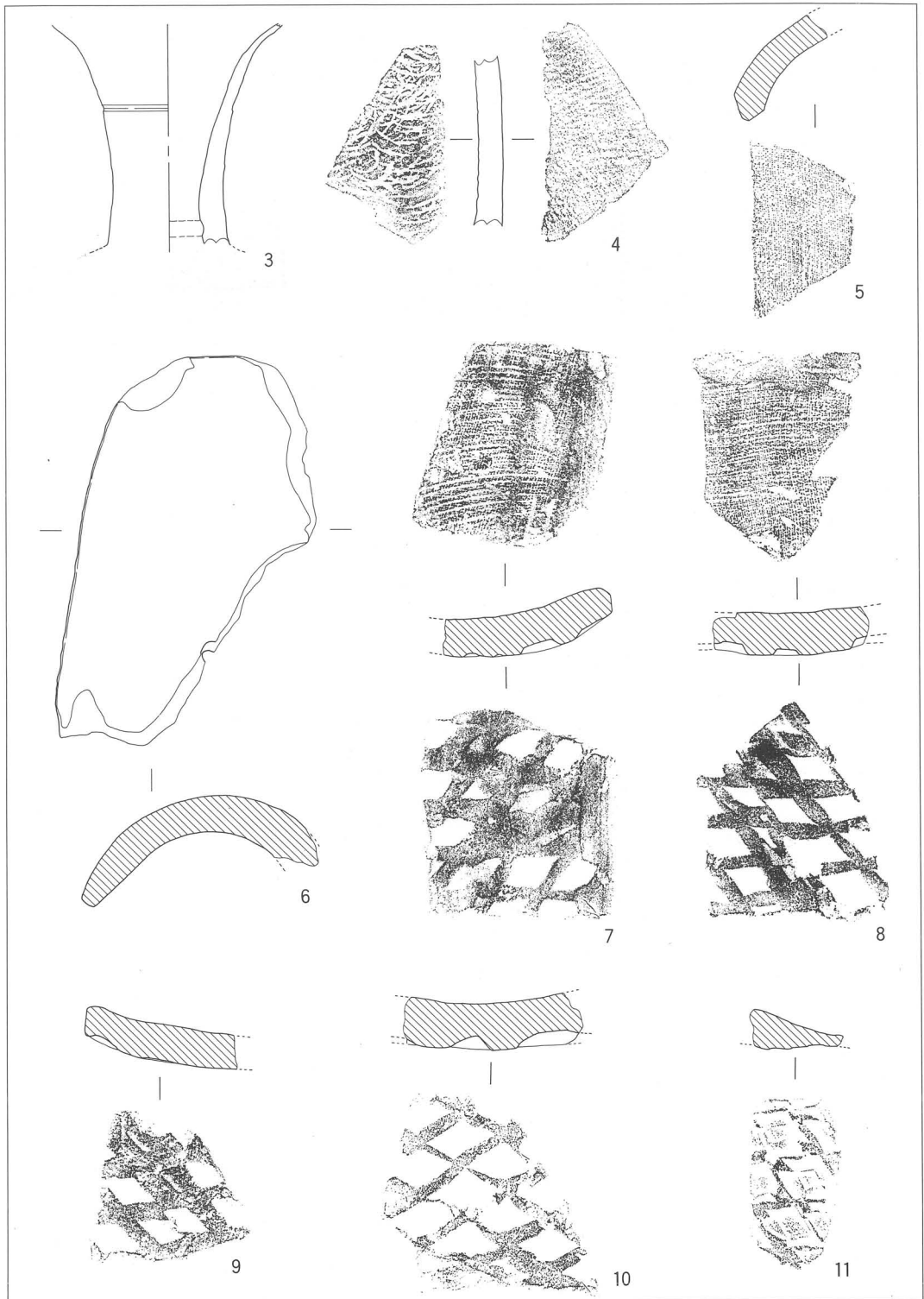


图5. 出土遺物実測図(2) (1/3)

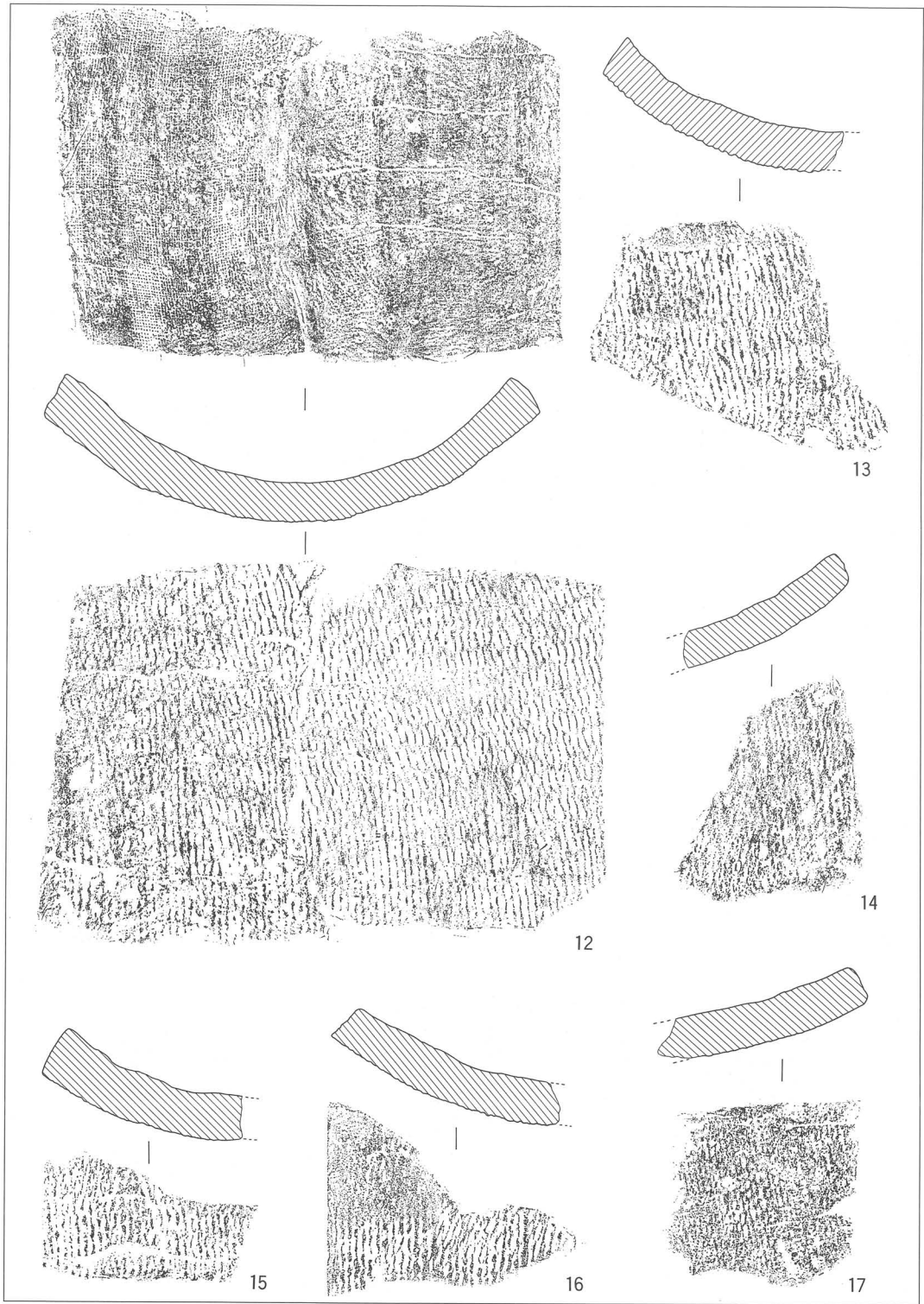


图6. 出土遺物実測図 (3) (1/3)

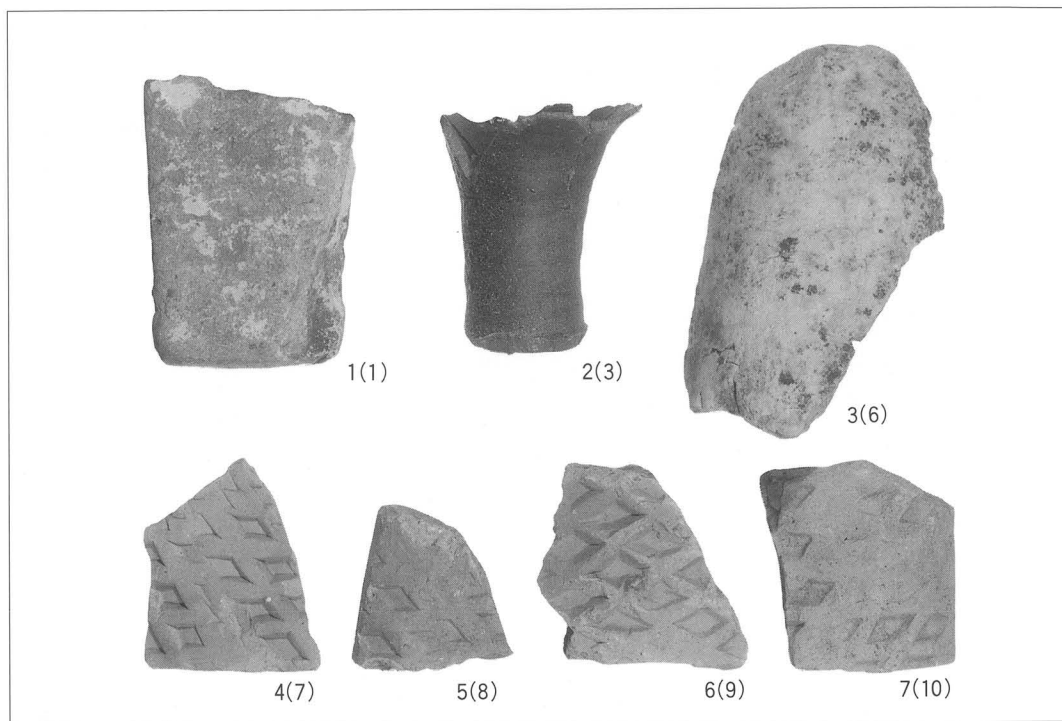


写真4. 出土遺物 (1)

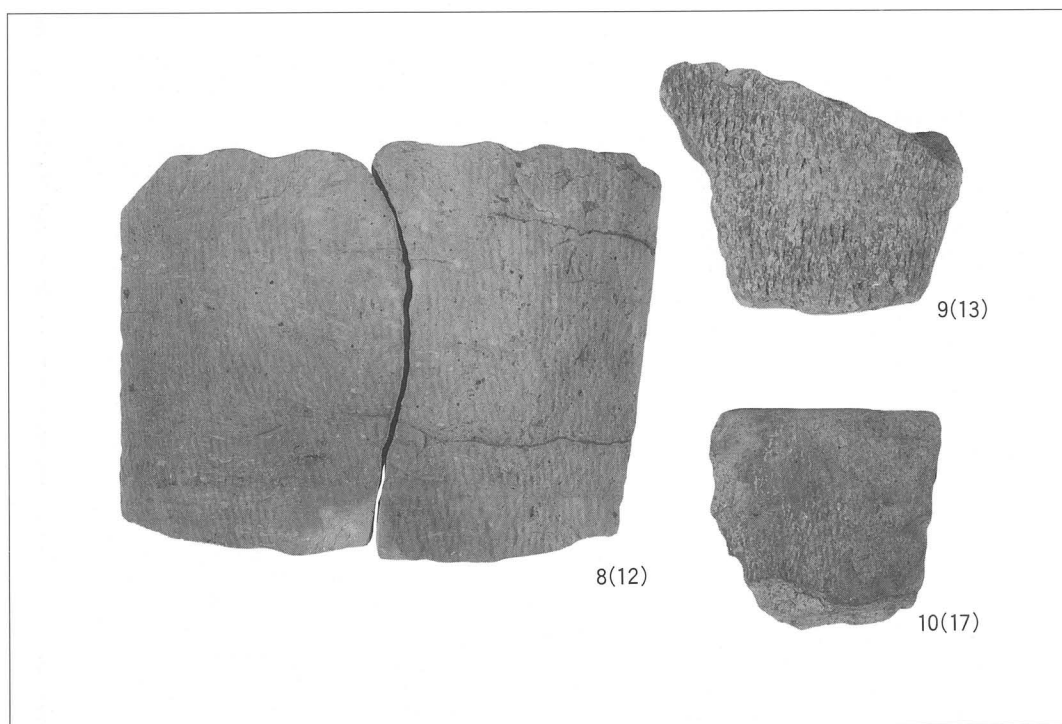


写真5. 出土遺物 (2)

Ⅳ 伊丹廃寺跡第37次調査

所在地 伊丹市緑ヶ丘4丁目41番地

調査面積 35m²

調査期間 平成3年11月4日～11月30日

調査概要 今回の発掘調査は、前回の第36次調査のすぐ北側で行った伊丹廃寺東築地の調査である。前回の調査は、史跡地内で

の現状変更の事前調査として実施したものであるが、今回の調査もこれに引き続いて行った関連調査である。昭和62年に実施した前回の調査の後、土地所有者の事情により史跡の現状変更許可申請の取り下げの申請が行われ、いったん住宅の増築計画は白紙となったが、平成3年になって、前回の住宅増築計画を若干変更する内容で再び現状変更許可申請が行われた。今回の調査は、この申請に基づく事前調査として実施したものである。調査範囲は、前回の調査範囲と1m隔てた北側から伊丹廃寺東方基壇跡までの約35m²である。

遺構 今回の調査では、築地の内側の溝の確認を行わず、築地の中央部から東側を対象にした。検出した遺構は、築地と前回の調査で検出した溝3の続き、そして新たに溝3の終

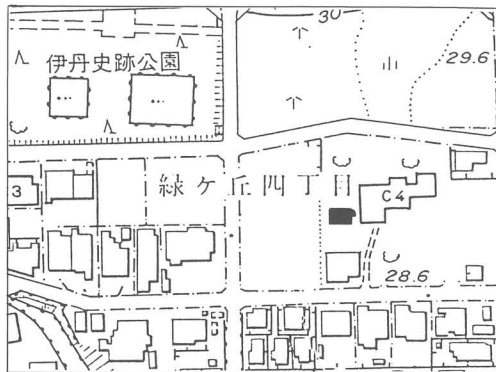


図7. 調査区地点図



写真6. 調査区全景

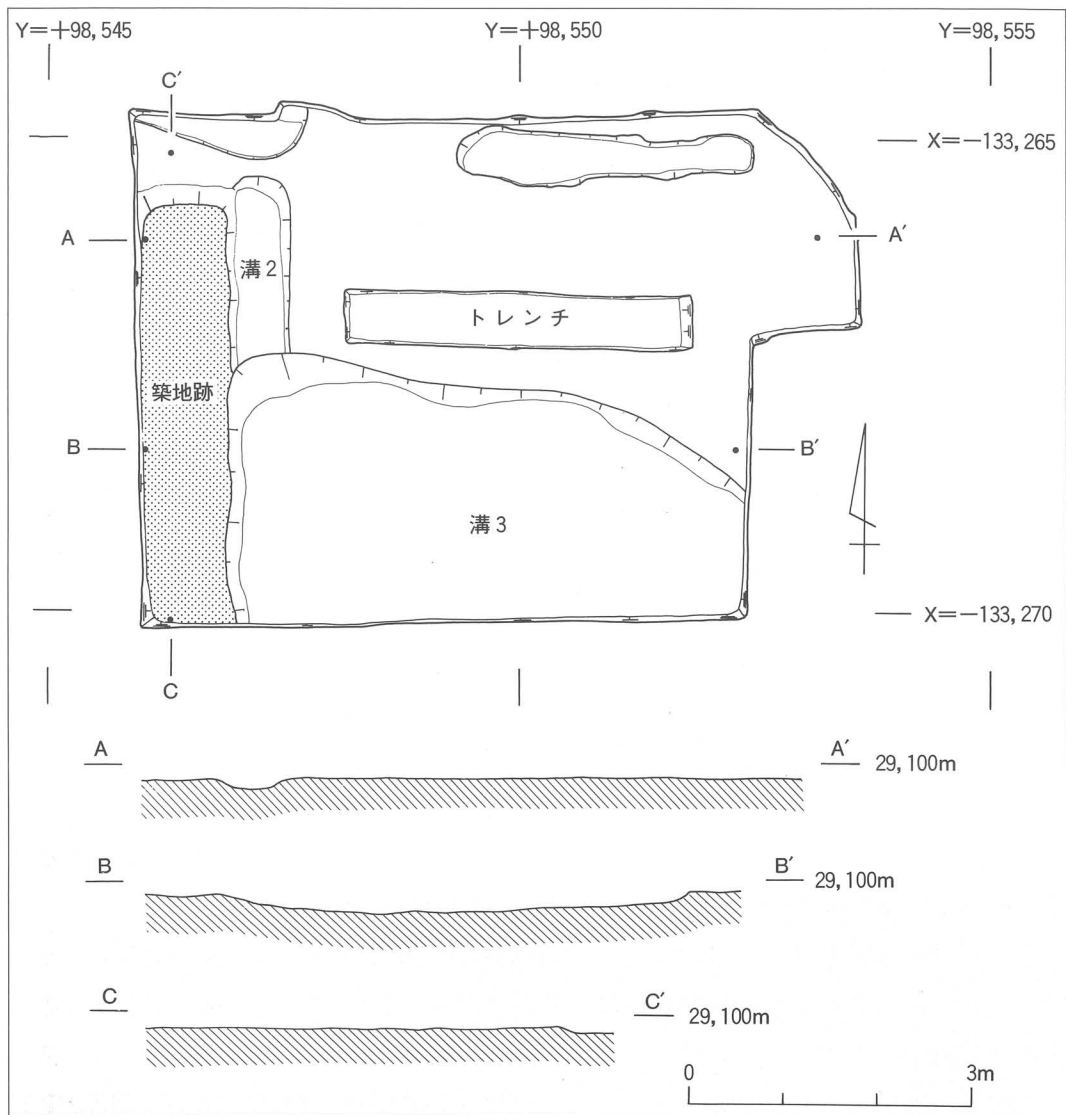


図8. 伊丹廃寺跡第37次調査実測図

結したところから築地に沿って北に延びる溝2である。

築地の遺存状態は悪く、築地の盛り土などは残っておらず、基底部の地山だけになっていた。それは、僅かに溝2によって築地の範囲が識別できる程度である。この築地も調査区北壁の手前1mの所で緩やかに落ち込んで終結している。また、これに対応するように溝2も同じ所で終わっている。このあたりは調査区の北西隅で、樹木の根の攪乱などもあり、明瞭とはいえないが、遺構の状況からこの場所に門が築かれていた可能性も考えられよう。

前回の第36次調査地点から延びてくる溝3は、調査区の中央部で終わりとなり、これよ

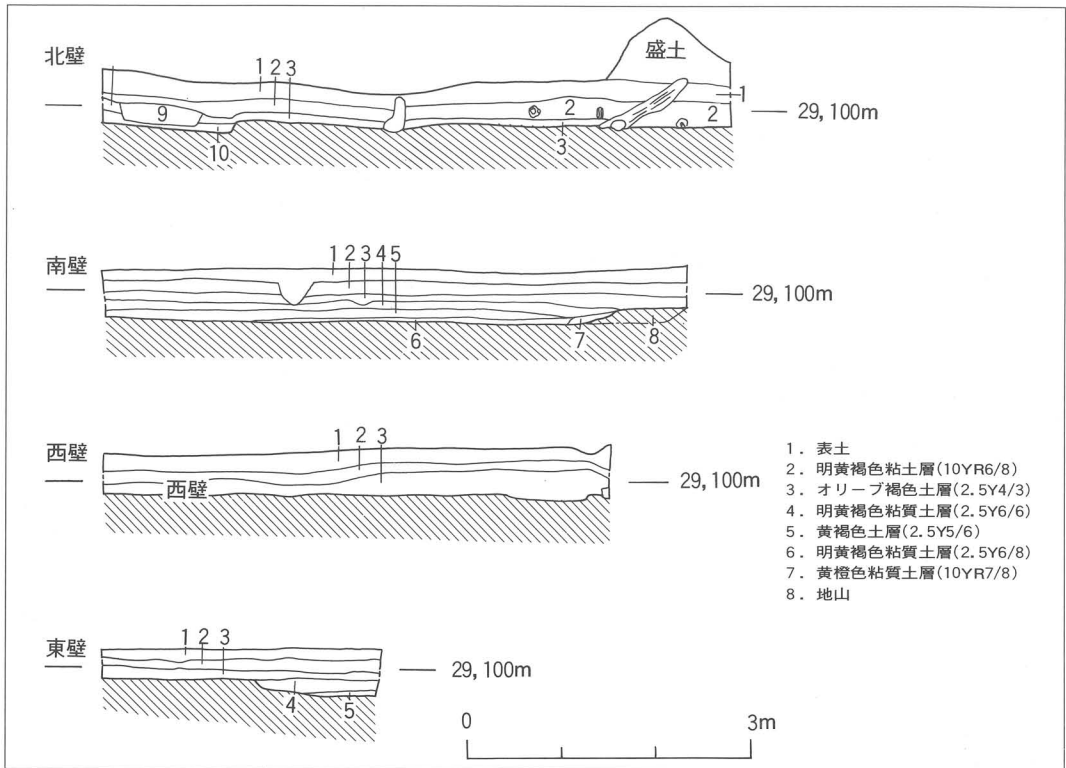


図9. 伊丹廃寺跡第37次調査実測図

り北に向けては、築地に沿って幅の狭い溝2が続く。溝2の規模は、幅が64～68cm、深さが10cmとなっている。溝2と溝3の新旧の関係は明らかではない。

溝3の内部からは、格子目叩きの平瓦や縄目叩きの平瓦、そして丸瓦や須恵器が出土している。この中には、調査区の北側にある東方基壇周辺で出土するといわれる伊丹廃寺Ⅳ期の軒丸瓦などの時期の新しい遺物を含まない。このことから、溝3は築地の外側の溝として掘られたものと考えられ、伊丹廃寺の後身寺院と関連するといわれる東方基壇の築造された頃には既に埋まっていたと考えられる。

遺物 出土遺物の総量は遺物整理箱に4箱、瓦片260点、須恵器片8点、陶磁器片15点である。瓦片は、伊丹廃寺跡第36次調査出土の瓦片よりも全体的にみて大きい破片である。

1～5は須恵器である。1は甕で、口縁



写真7. 東築地跡(南より)

端部はまっすぐ上方に延び、下方に鋭い突帯をもつ。これは陶邑編年のI型式の5段階に相当する。2、3は坏身、「ハ」の字に開く貼り付け高台で、色調は2は灰色、3は黄灰色をしている。3は焼成があまい。2、3は陶邑編年のIV型式の1段階に相当する。4は長頸壺の頸部。5は甕の体部で、内面は同心円叩き、外面は平行叩き調整である。6～12は丸瓦で、6は玉縁付丸瓦、玉縁部の両側を斜めに切っている。黒灰色、両面篋撫で調整を施し凹面に布目が残る。7は行基葺の丸瓦で厚みは2.2cm、淡橙色、両面篋撫で調整である。8～12は凹面に布目残り、凸面は篋撫で調整、厚みは1.6～1.8cm、色調は8～11で灰褐色で、12は灰色である。14～16は格子目叩きの平瓦である。格子目の一辺が1.5～1.8cmの菱形を成し、格子目の条線が7～8mm、厚みは1.8～2.2cmである。色調は13が灰色、14～16が灰褐色である。凹面には布目が残る。14の側面は斜めに切られ、16は垂直に切られている。これらの格子目叩きの平瓦は、高井氏の分類(高井悌三郎他「撰津伊丹廃寺跡」伊丹市教育委員会1966年3月)によると、伊丹廃寺所用の平瓦Iに対応する。図示はしなかったが、縄目叩きの平瓦も出土した。7、16以外は溝3より出土した。1の須恵器の甕は混入したものと考えられる。

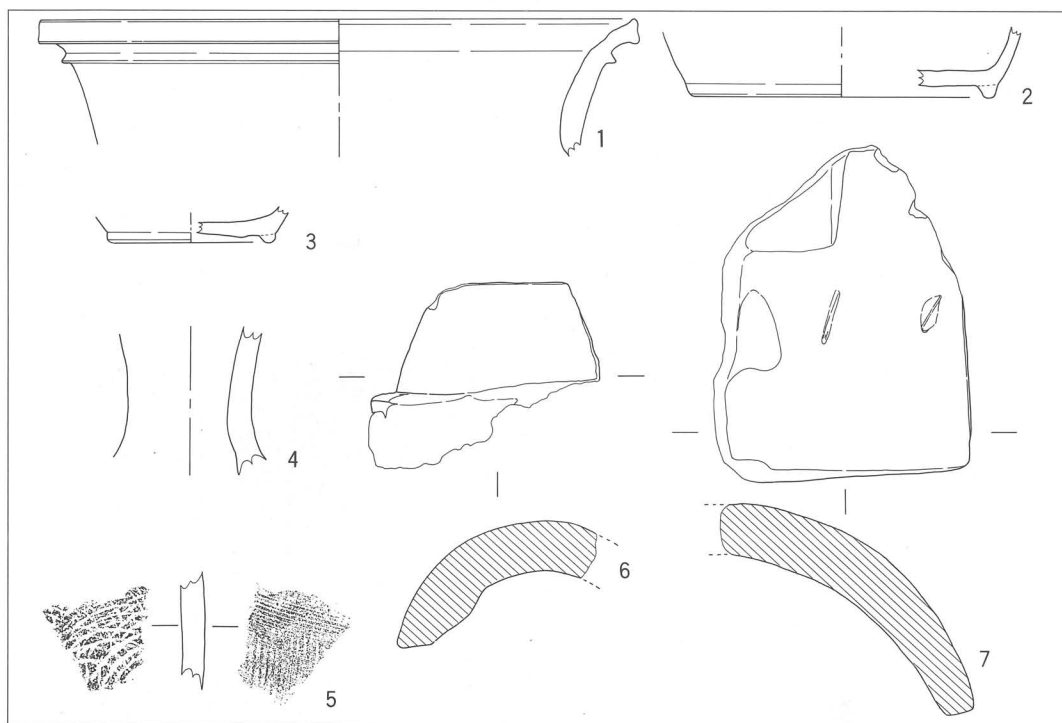


図10. 出土遺物実測図 (1) (1/3)

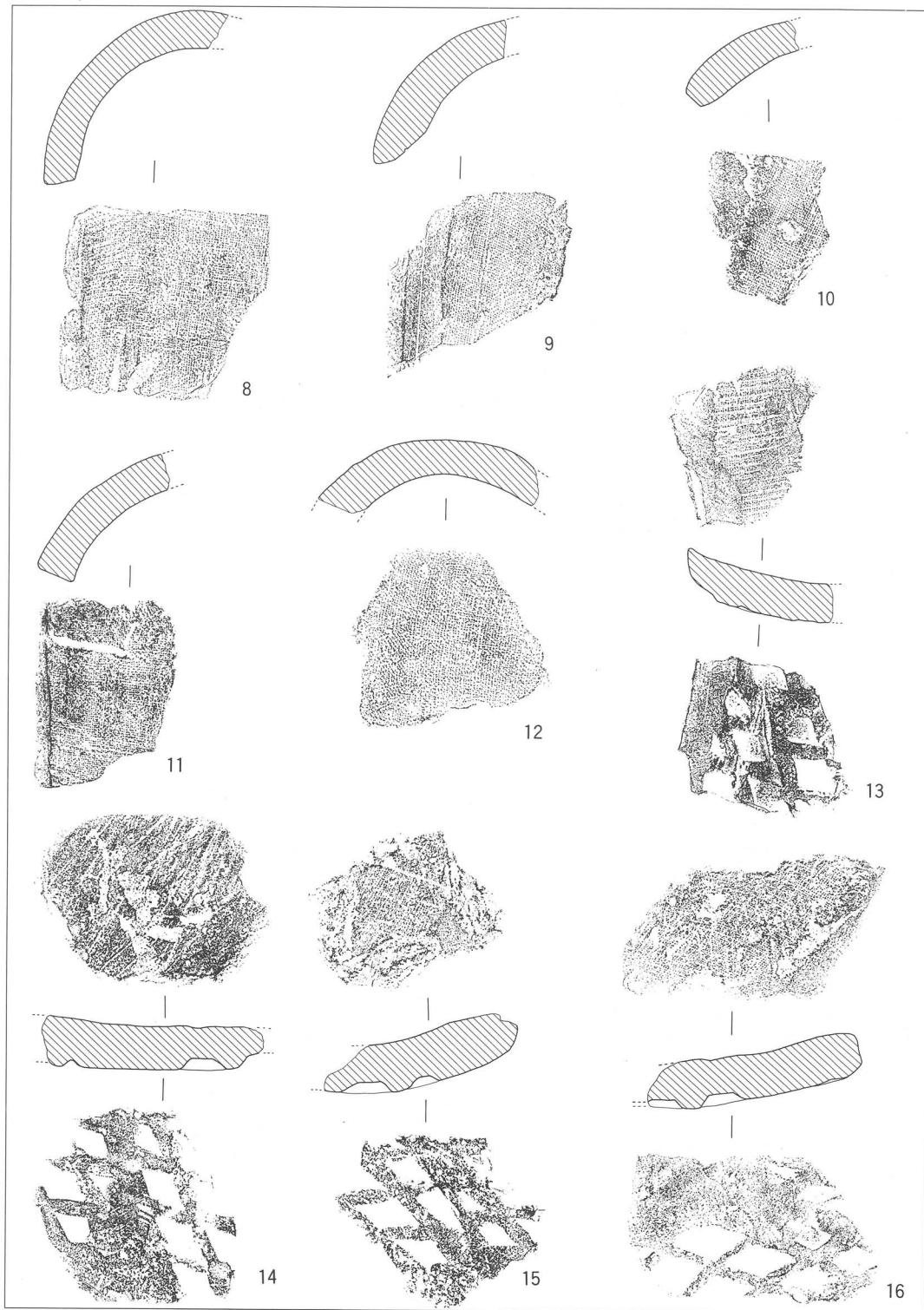


图11. 出土遺物実測図 (2) (1/3)

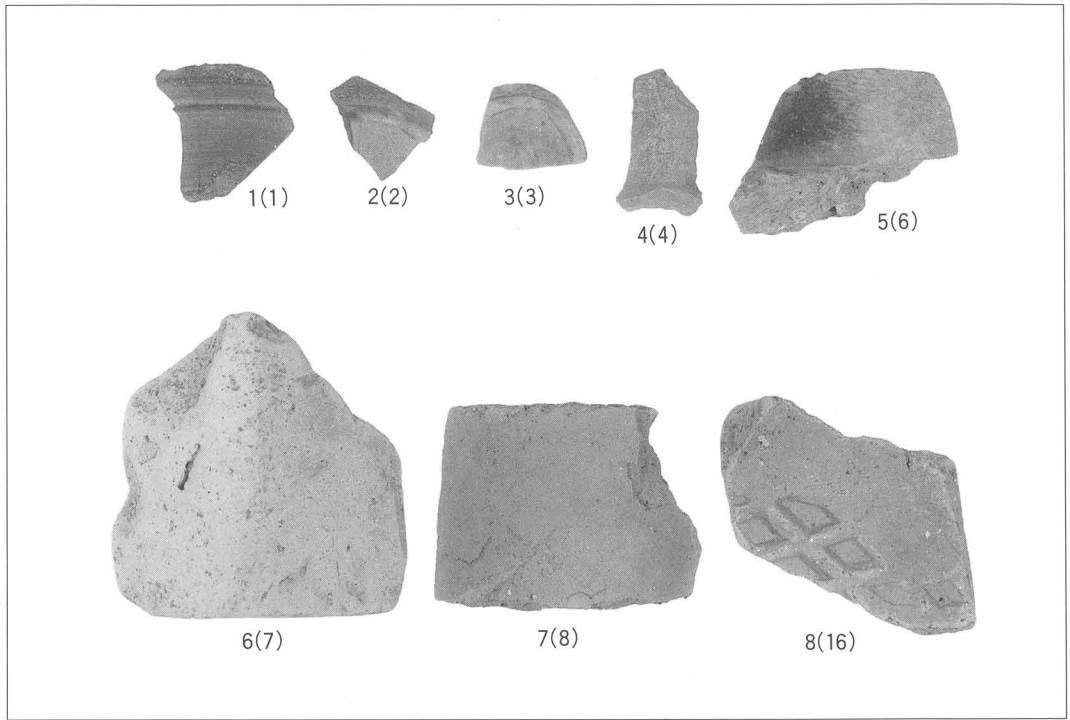


写真 8. 出土遺物〈表〉(1)

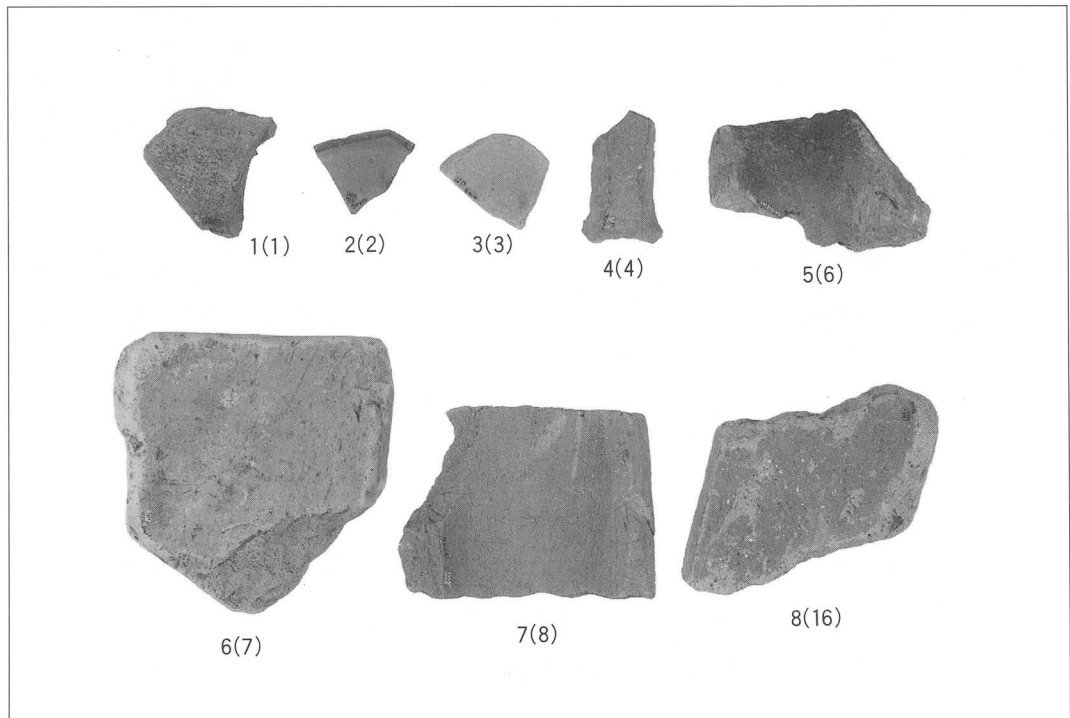


写真 9. 出土遺物〈裏〉(2)

V 緑ヶ丘遺跡第5次調査

所在地 伊丹市緑ヶ丘4丁目38-3、39-3・2

調査面積 A地区63m²、B地区24m²

調査期間 平成4年11月24日～12月3日

調査概要 伊丹廃寺跡の大半は昭和41年3月22日付で国史跡に指定されているが、講堂跡や僧坊跡などの一部については史跡の

指定からはずれている。そのため、この部分については、廃寺の周辺部にある遺跡を含めて「緑ヶ丘遺跡」として遺跡の保護を図っている。

本遺跡のこれまでの発掘調査は、すべて廃寺跡の北部地域で実施している。その位置は、この概報の付図を参照していただきたい。第2次調査では、2棟以上の掘立建物跡が検出され、第3次調査では方形の掘方の大型の掘立柱建物、また第4次調査では6棟の掘立柱建物が発見されている。これらの遺構は廃寺跡の時期と平行するもので、廃寺と関係の深い建物跡と考えられる。

今回の調査地点は、これまでの調査とは異なり廃寺の東側に当たる場所で、東築地からは35mの距離にある。調査区は2地区に分かれ、北側をA地区、南側をB地区とした。両地区の間隔は11mとなっている。

遺構

{A地区} A地区の遺構はすべて地山面上で検出したが、各遺構の掘り込み面は上層からとなっている。遺物は僅かで、遺構の時期を決定するまでには至らない。次に各遺構の説明をしておきたい。

溝1 幅40から60cm、深さ20で、調査区北側から南に向かって弧を描くように延びている。出土遺物は、近世以降の瓦がある。

溝2 幅33～43cm、深さ10cm。出土遺物はない。

溝3 幅30～60cm、深さ10cmで、調査区東側から延びて途中南に向けて折れている。出土遺物には、須恵器片が1点ある。

溝4 幅50cm、深さ15cm。出土遺物はない。

土坑1 幅1.7m、深さ40cmで、東西方向に延びている。土坑の東側は土坑2に切られている。

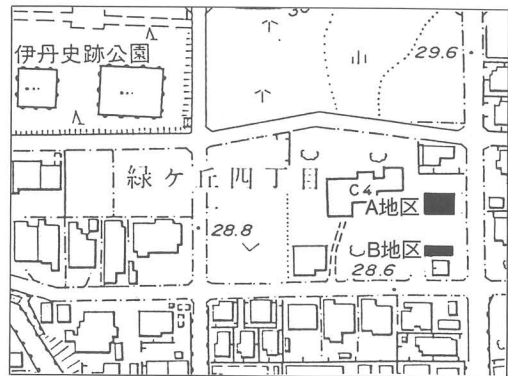


図12. 調査地点図 (1/2,500)

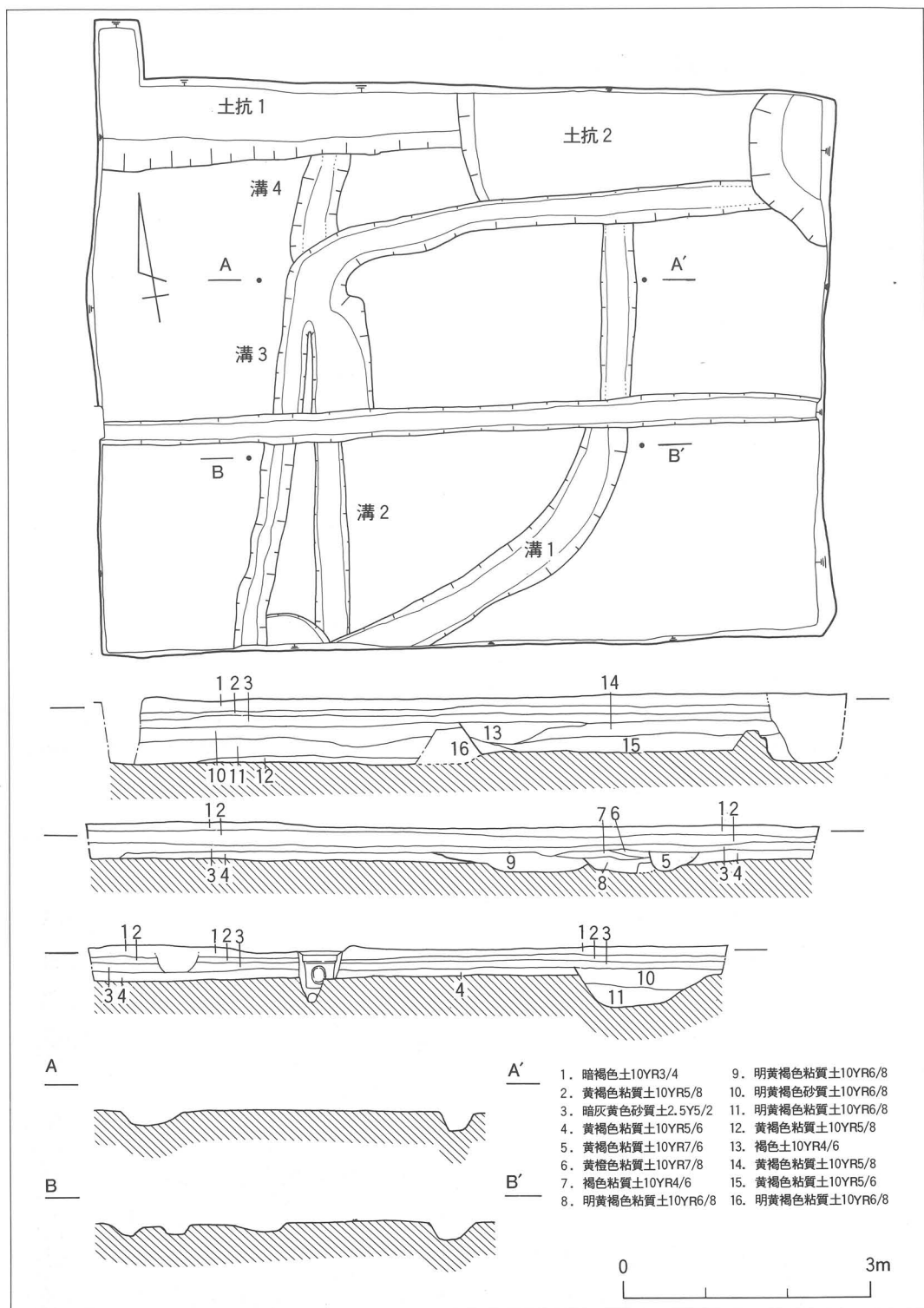


图13. 緑ヶ丘遺跡第5次調査A地区実測図

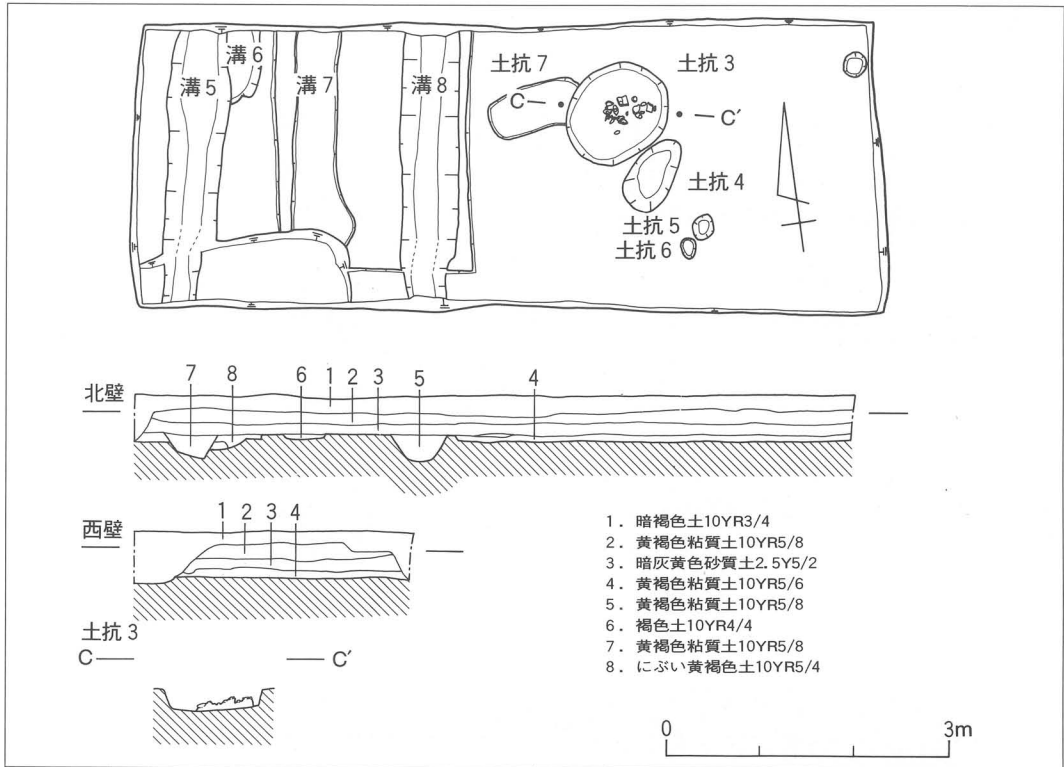


図14. 緑ヶ丘遺跡第5次調査B地区実測図

土坑2 幅、長さともに不明で、深さは40cmである。出土遺物には瓦や須恵器の破片がある。

{B地区} B地区の遺構は土坑3を除いてまったく遺物が出土していない。

溝 溝5は、幅50から67cm、深さ25cm。溝7は、幅48～67cm、深さ5cm。溝8は、幅58～63cm。

土坑3 規模は、長軸120cm、短軸97cmで深さは23cmを測る。内部から石に混じって伊丹廃寺所用の軒丸瓦(波状文縁複弁花文軒丸瓦)が出土している。

遺物 出土遺物の総量は遺物整理箱に1箱、破片数にして15点で、ごく少量である。瓦片10点、須恵器片3点、土師器片2点出土した。

土坑3より瓦片が数点出土したが、図示したものは、伊丹廃寺所用の軒丸瓦Ⅱ(波状文縁複弁花文軒丸瓦)(高井悌三郎

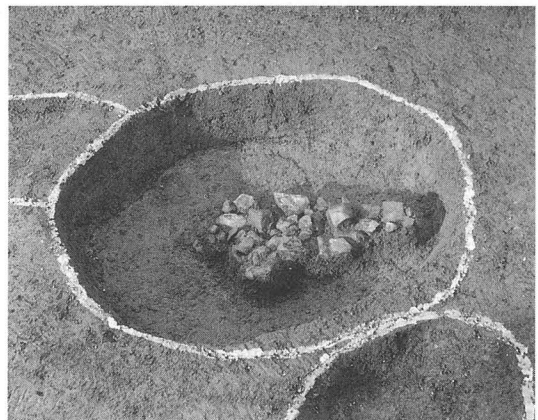


写真10. B地区土坑3(南より)

他「摂津伊丹廃寺跡」伊丹市教育委員会1966年3月)であり、1点のみであった。他に、瓦片では平瓦、須恵器片では坏等、土師器片は細片であるので器種不明である。

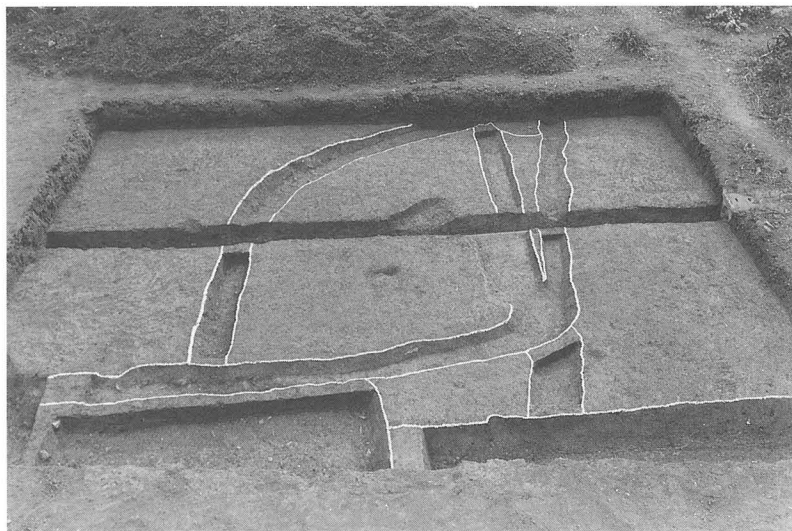


写真11.
A地区全景
(北より)



写真12.
B地区全景
(東より)

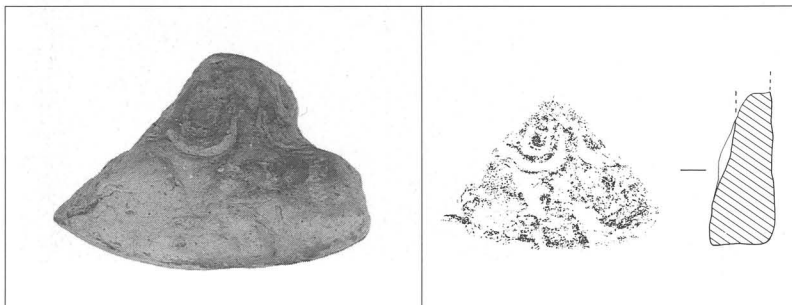


写真13. 出土遺物(左)
図15. 出土遺物実測図
(1/3)(右)

Ⅵ 御願塚古墳第5次調査

所在地 伊丹市御願塚4丁目323-1

調査面積 42m²

調査期間 平成5年4月22日～4月29日

調査概要 御願塚古墳の位置する伊丹市南郊には、尼崎市域から広がる稲名野古墳群が分布している。この古墳群は池田山古墳、

大塚山古墳、御願塚古墳を中核とする古墳時代中期の古墳群で、5世紀初頭に築造された池田山古墳をその早い時期のものとし、その後、御園古墳が築造された6世紀前半頃まで続いている。

この一帯には、かつては多数の古墳が存在していたが、この地域の開発が進につれ次第に消滅していった。先ほどの池田山古墳や大塚古墳なども調査の後消滅しているのである。しかし、その大半は未調査のまま姿を消している。幸いにも伊丹市域には、御願塚古墳や

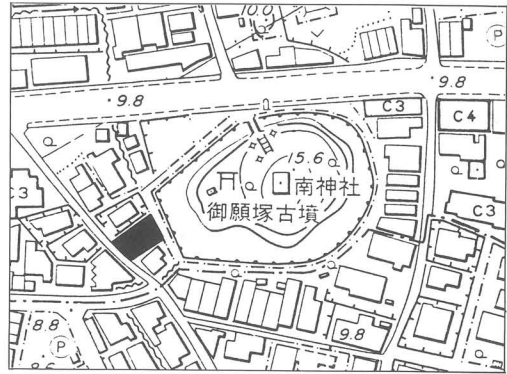


図16. 調査区全景 (1/2,500)

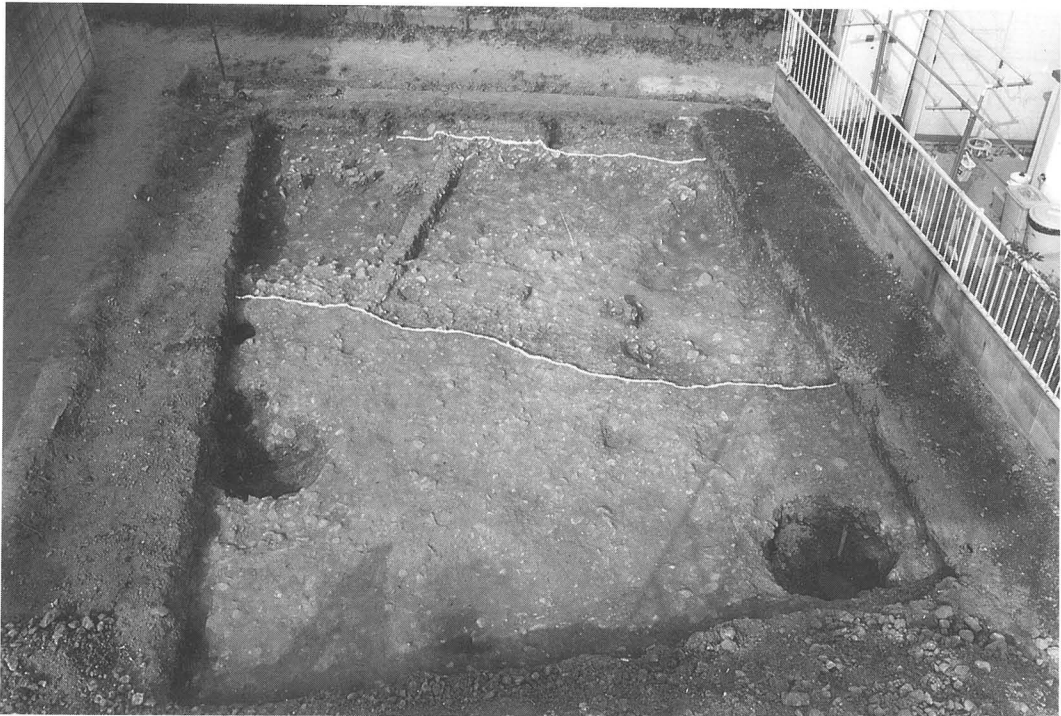


写真14. 調査区全景 (西より)

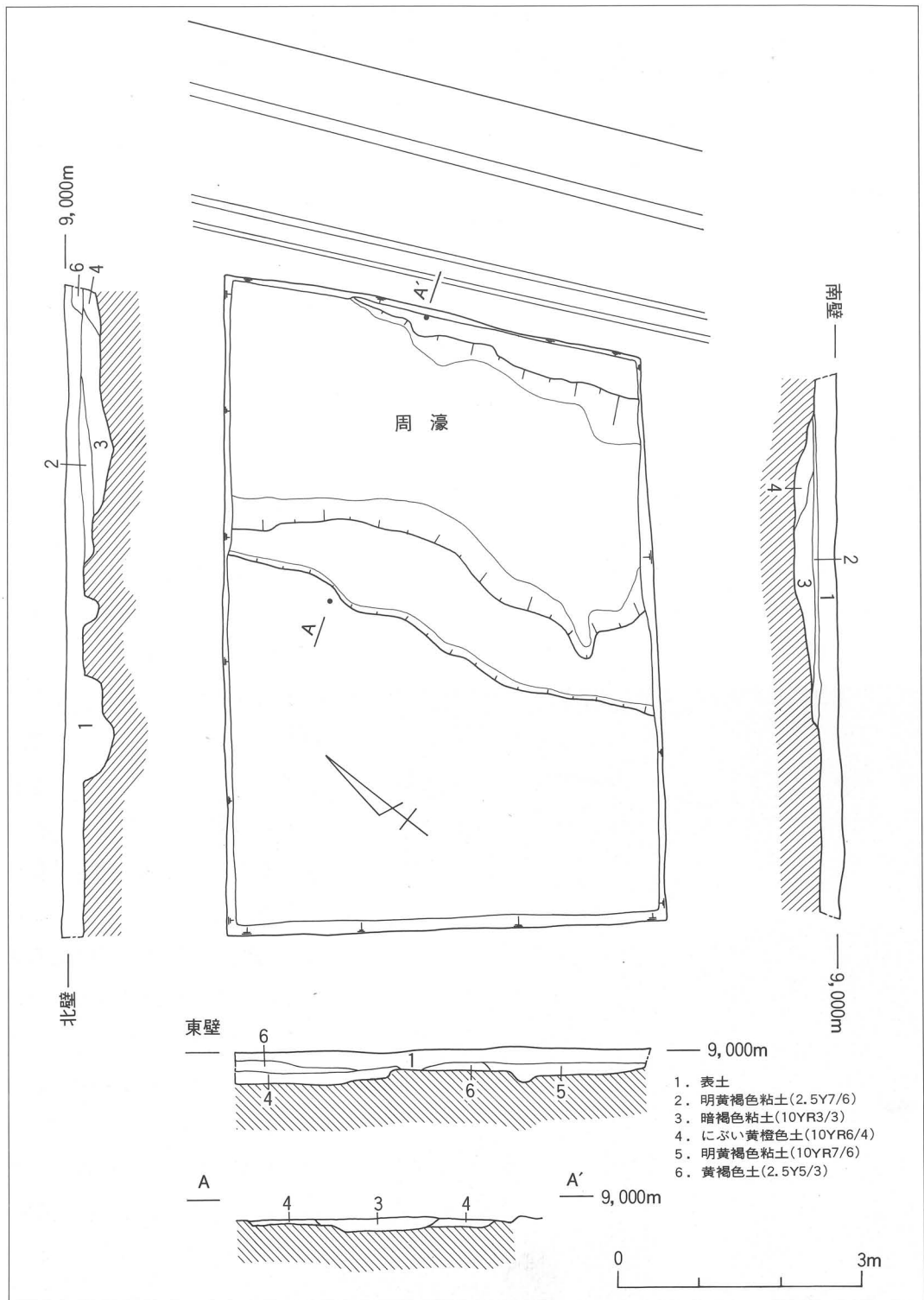


図17. 御願塚古墳第5次調査実測図

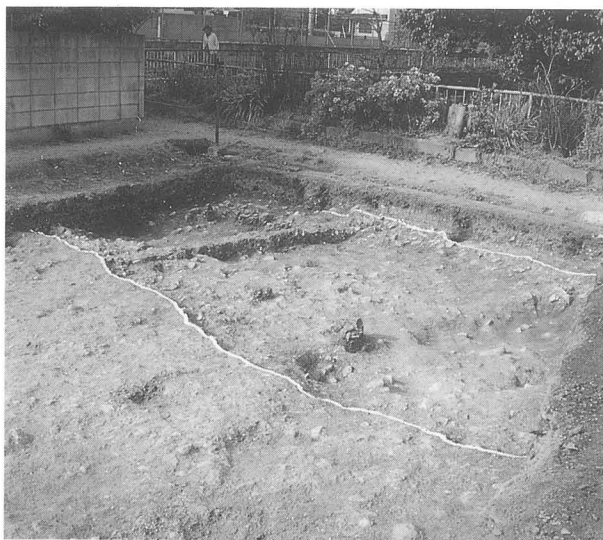


写真15. 周濠検出状況(南より)



写真16. 埴輪検出状況(南より)



写真17. 埴輪検出状況(北より)

柏木古墳などがのこっている。なかでも御願塚古墳は墳丘が良好に残り、周濠も復元されている。また昭和41年には兵庫県の史跡に指定されて保護が図られている。

本古墳は、西側に短い前方部を有する帆立貝式の前方後円墳で、全長は52m、後円部径39m、同高さ7m、前方部長13m、同幅19m、同高さ2mを測る。墳丘の周囲には馬蹄形の周濠が巡っている。周濠の規模は、後円部東側と南側で7m、前方部側で11mあり、深さは1m程度となっている。

本古墳の発掘調査は、周濠の復元を目的として実施した環境整備にともなって行った調査が最初のもので、これを第1次調査として現在までに5回の調査を行なっている。しかし、これらの調査は周濠及び外堤部の調査であって、墳丘にはまったく手が付けられていない。よって主体部の構造などは不明となっている。古墳の東側と北側で実施した第2次から4次調査によって、外堤部に幅4m程度の小規模な濠が巡っていることが確認された。この結果により二重周濠の可能性が指摘されてきた。

今回の調査は、外側の濠がはたして西側にまで続いているかを確認することを目的に実施したものである。

遺構 前方部側の濠端には小さな里道があり、その道に沿って東西7m、南北6mの調査区を設定した。調査の結果、調査区の古墳寄りから幅3.4～3.8mの濠跡を検出した。濠の上端の方向は直線とはならないものの、ほぼ内側の濠と平行している。濠の深さは、内側で15cm、中央部で28cmを測り、外側はいったん緩やかに立ち上がり、幅70cm～1mの平坦面の後再び立ち上がる。外側の立ち上がりは7～8cmとなっている。

埴輪の出土状態をみても、濠の中央部から内側あたりに集中する傾向がある。いずれの埴輪も濠底からは出土せず、底から10数cm上から出土している。

遺物 出土遺物の総量は遺物整理箱に1箱、遺物の総数は83点で、すべて埴輪片である。円筒埴輪片は23点、このうち須恵質の円筒埴輪片は17点で、須恵質の割合が大きい。形象埴輪と考えられる破片は60点出土したが、いずれも小片である。埴輪片はすべて濠内より出土した。

1～10は須恵質の円筒埴輪である。1、2は口縁部である。器面調整は内外面ともに「ヨコハケ」が施されている。3～10は突帯を有する胴部片である。このうち、5、6、7には円形の透孔が穿たれている。器面調整はいずれも外面は、1次調整が「タテハケ」の後、断面台形の突帯を貼り付け、突帯とその周囲に「ヨコナデ」をし、2次調整に「ヨコハケ」を施す。この「ヨコハケ」は川西宏幸氏(『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号1978年)の分類によると「B種ヨコハケ」に該当する。3の外面の「ヨコハケ」の単位は、3.8cm、8は4.6cmである。3、7、8の内面は、指で押さえた後、その上に「ヨコハケ」を施している。4、5、6、9、10の内面は「ヘラナデ」を施している。1～10の色調は灰褐色で、1～5mmの白色の小石が含まれる。1～10の須恵質の円筒埴輪片は、調整などから同一固体の可能性もある。11～13は円筒埴輪で、突帯を有する胴部片で、色調は淡橙色ある。11、12の器面調整は、外面は「B種ヨコハケ」である。内面には「ヨコハケ」が施されている。13は円筒埴輪であるが、摩滅が著しく調整は不明で、外面の一部が黒くなっている。14と写真の15、16は形象埴輪と考えられるもので、内外面の調整は摩滅が著しいため不明である。小片であるので器形はわからないが、14は家形埴輪の屋根か？15、16は蓋形埴輪か？と考えられる。

1～12の円筒埴輪は、突帯の断面形が台形で、外面の器面調整が「B種ヨコハケ」であり、円形の透孔が穿たれていることから、川西氏の編年によるとⅣ期に入る。また、形象埴輪と考えられる破片が多く出土している。

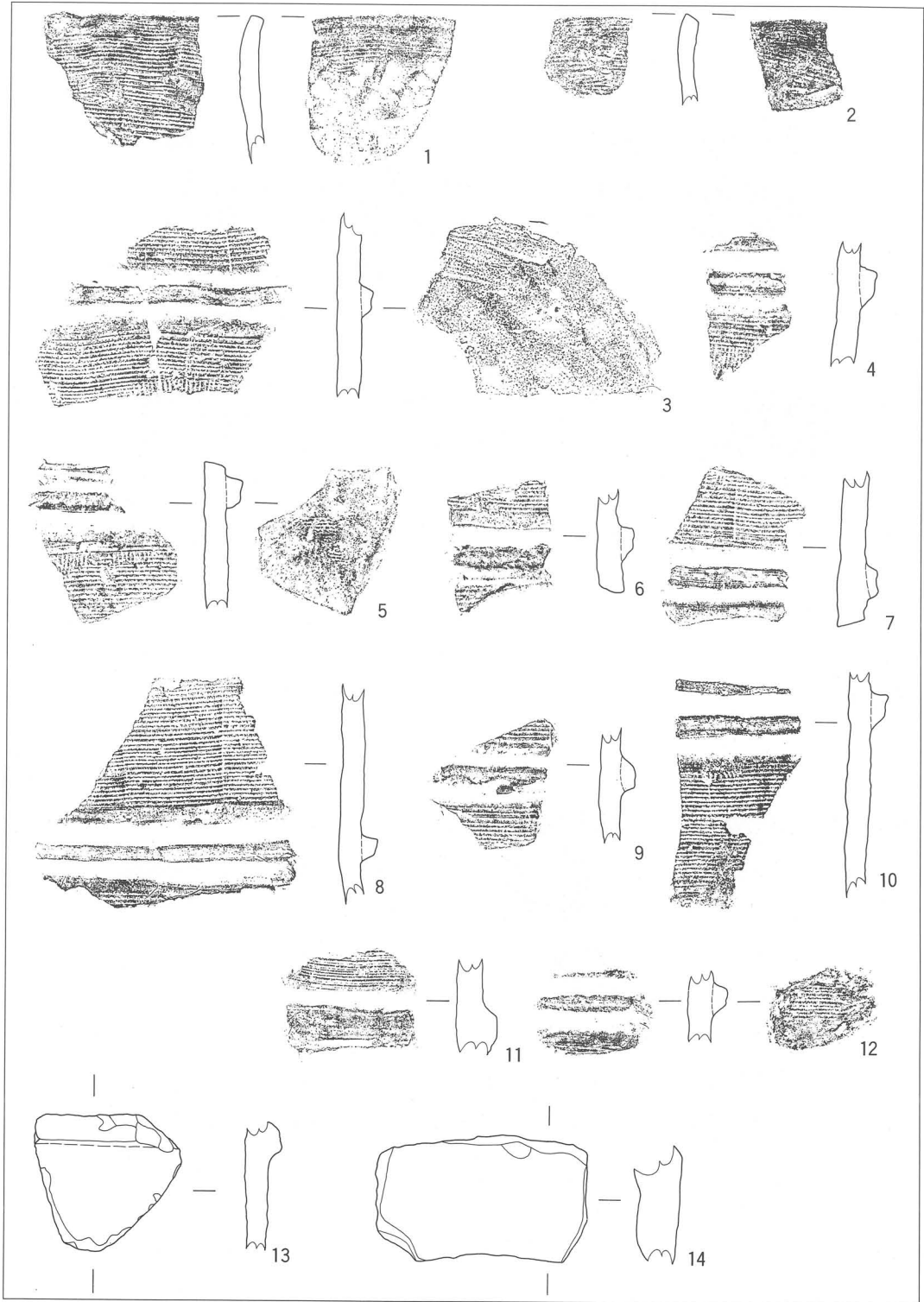


图18. 出土遺物実測図 (1/3)

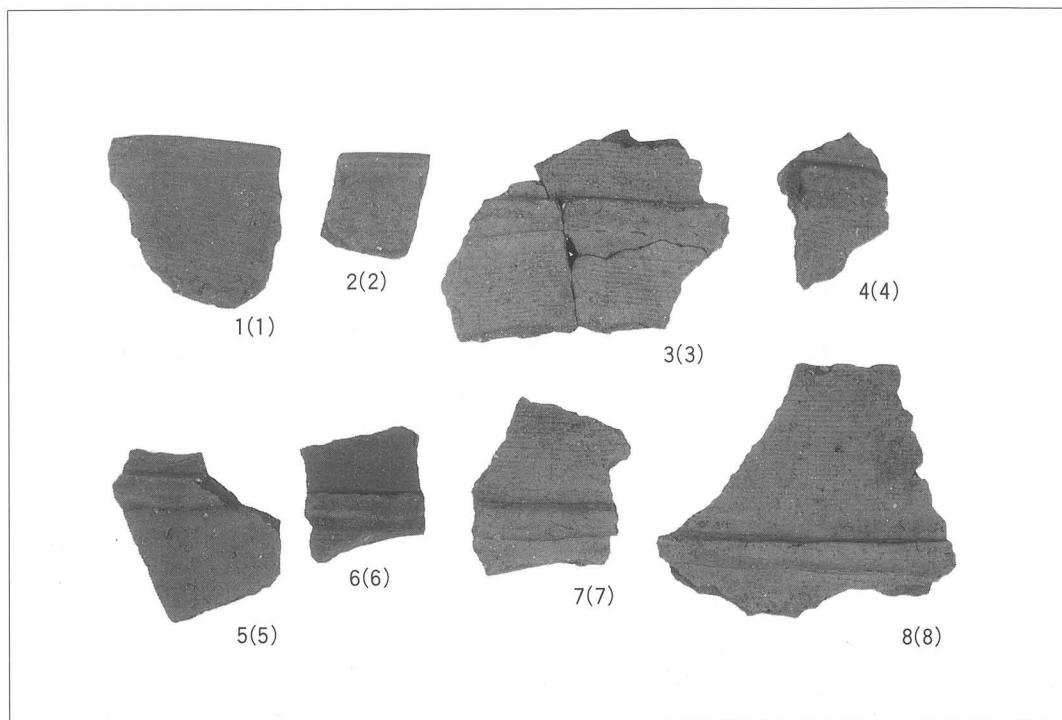


写真18. 出土遺物 (1)

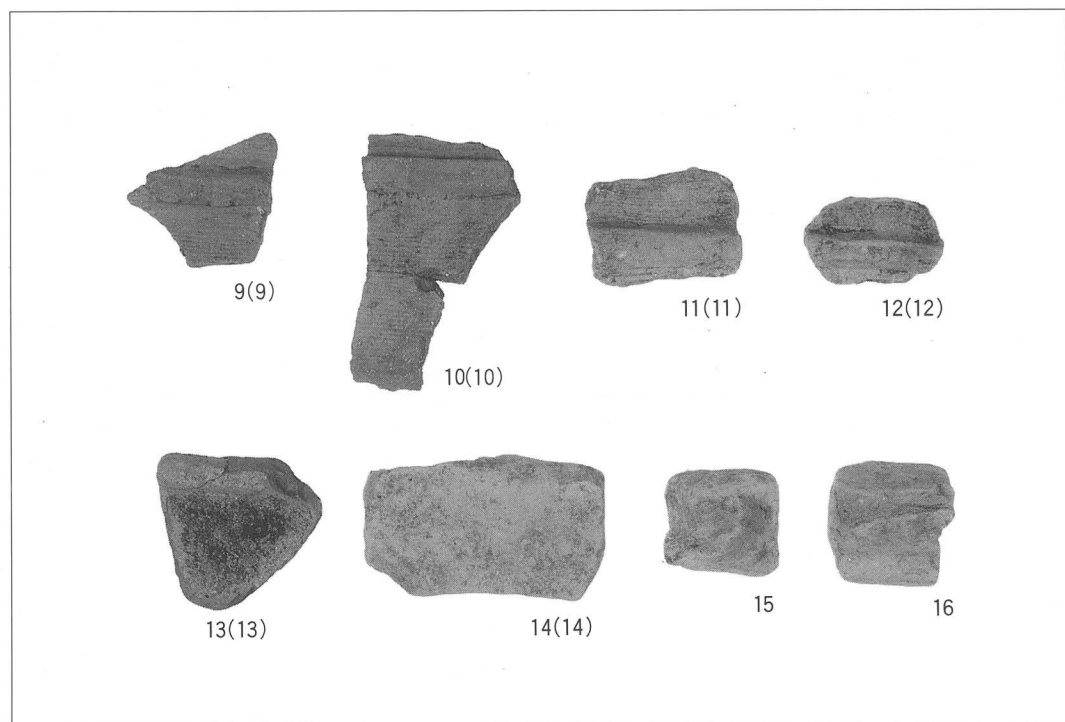


写真19. 出土遺物 (2)

Ⅶ ま と め

この調査概報は、国庫補助事業として、昭和62年度から平成5年度まで実施した発掘調査のなかで、伊丹廃寺跡第36次調査、伊丹廃寺跡第37次調査、緑ヶ丘遺跡第5次調査、御願塚古墳第5次調査の成果をまとめたものである。

最後に各遺跡の概略を述べて、まとめにかえることにしたい。

伊丹廃寺跡第36次調査、伊丹廃寺跡第37次調査

第36次調査・第37次調査の両地点は、伊丹廃寺の東築地跡にあたと推定される地点で、東方基壇跡の南側にあたる。

これまでの東築地跡の調査に関しては、第16次調査(昭和38年3月14日～同年4月14日)、第22次調査(昭和39年12月25日～昭和40年1月7日)^(註1)の両調査により、東築地の存在が明らかになった。その後の、第32次調査(昭和54年5月7日～同年5月14日)、第33次調査(昭和62年1月27日～同年3月26日)^(註2)の両調査により、東築地跡の総延長が約115mにわたって延びていることが判明した。第36次調査・第37次調査の両地点はこの間にある。第37次調査地点は、第36次調査地点の1m隔てた北側から、伊丹廃寺東方基壇跡までの範囲にある。

検出した遺構は、築地跡と溝4条である。これらは、ほぼ南北方向に走る。築地の遺存状態は悪く、既に築地の盛土などは削平されていて地山だけとなっている。築地の規模は、基底部で4mを測る。築地の両側には築地と平行して、溝1・溝2が検出された。内側の溝1は、幅40～50cm、深さ10～20cmである。外側の溝2は、幅64～68cm、深さ10cmである。この溝1・溝2は、雨落ち溝と考えられる。

築地は、第37次調査地点の北壁の1m手前のところで緩やかに落ち込んで終結している。このあたりは、調査区の北西隅にあたり、樹木の根の攪乱などもあり、はっきりとはいえないが、遺構の状況からこの場所に門が築かれていたと考えられる。

溝3は、幅4.8～5.8m、深さ10～20cmである。外縁は直線的でなく、多少入り組んでいる。また、第36次調査地点の北側で幅が広くなり、第37次調査地点の中央部で終結している。この調査地点より北方約80mのところでは実施した第33次調査地点でも、築地の外側に幅6.3～7.2mの幅広い溝が検出された。この溝が溝3と同じものであるとすれば、東築地に当初から設けられていた施設であると考えられる。しかし、西側及び北側の築地にはこの溝は付設されていなかったもので、東築地の特徴といえることができる。

遺物の大半は、溝3より出土した。格子目叩きの平瓦や縄目叩きの平瓦、行基葺の丸瓦

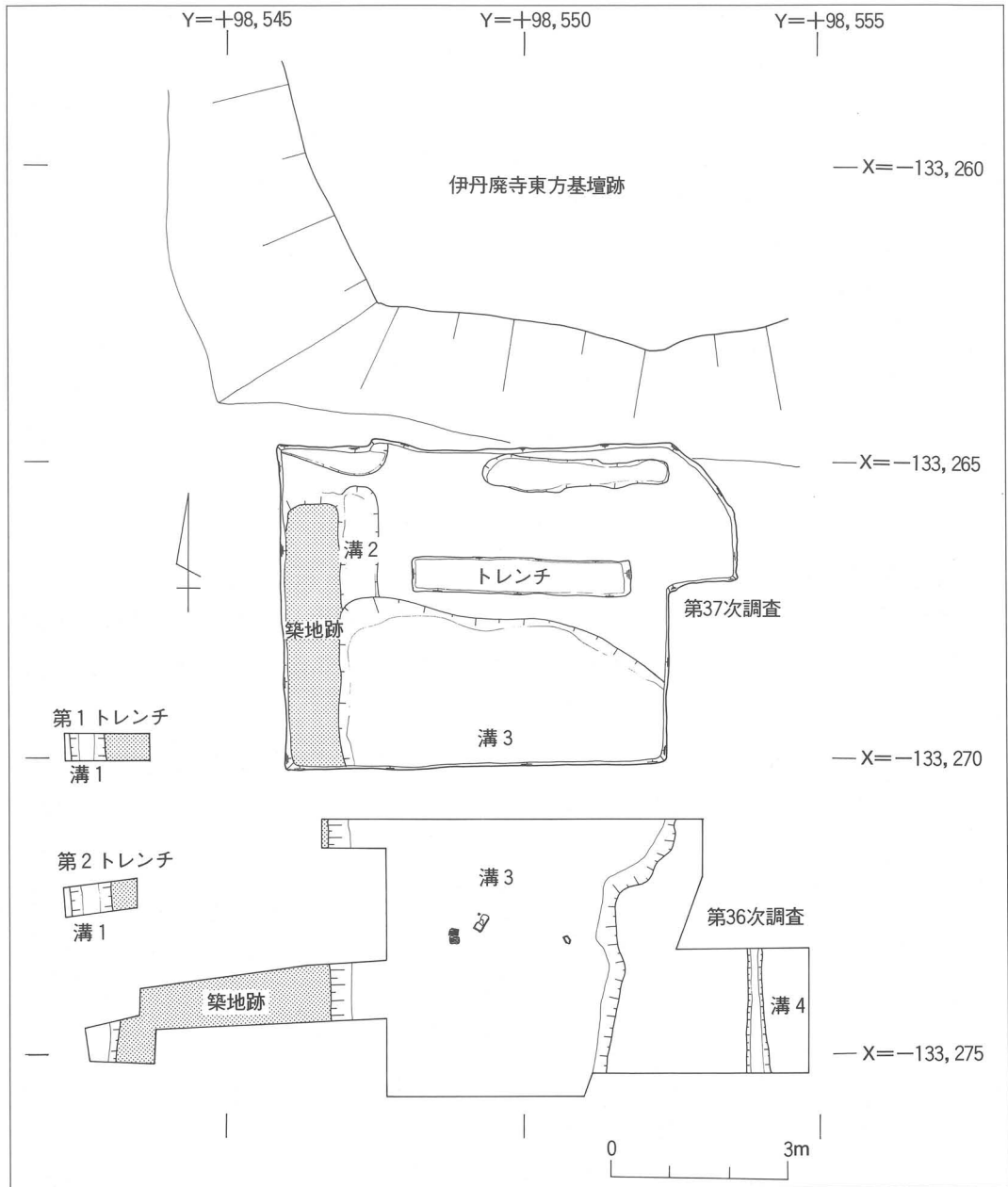


図19. 伊丹廃寺跡第36次・第37次調査実測図

や玉縁付の丸瓦、そして若干の須恵器などが、溝の内部より出土した。格子目叩きの平瓦は、高井氏の分類によると、伊丹廃寺跡所用の平瓦Ⅰに対応する。また、須恵器は、器種は坏身や長頸壺の頸部などが出土しており、陶邑編年のⅣ型式の1段階に相当する。

溝3より出土した遺物の中に、粘土紐の痕跡のある縄目叩きの平瓦(図6. 12・13・15)があるが、高井氏によると、紐づくりの手法で、「これは縄目叩き手法の平瓦として、この

遺跡においてそのはじめに来るものである」と指摘された。この瓦は、伊丹廃寺塔跡から多く出土している。

これらの遺物の中には、北側の東方基壇周辺で出土するといわれる伊丹廃寺Ⅳ期の軒丸瓦などの新しい遺物はない。このことより、溝3は築地の外側の溝として掘られたものと考えられ、伊丹廃寺の後身寺院と関連性のある東方基壇の築造された頃に既に埋まっていたと考えられる。

発掘調査は、伊丹廃寺跡の中心部はほぼ完了しているが、その周囲では解明されていないこともある。築地跡に関しては、西、北、東側は調査が行われているが、南側はまだ調査がされていない。また、南大門も発見されていない。これまでの発掘調査の結果から、南築地と南大門は史跡指定区域から南へはずれている可能性もあり、今後の調査で、伊丹廃寺跡史跡指定区域外の住宅地において発見されることも考えられる。

緑ヶ丘遺跡第5次調査

伊丹廃寺跡と関連性があると考えられる建物跡がこれまでの調査で発見された(付図参照)。発見された建物跡は、第2次調査(昭和60年6月22日～同年8月8日)では、2棟以

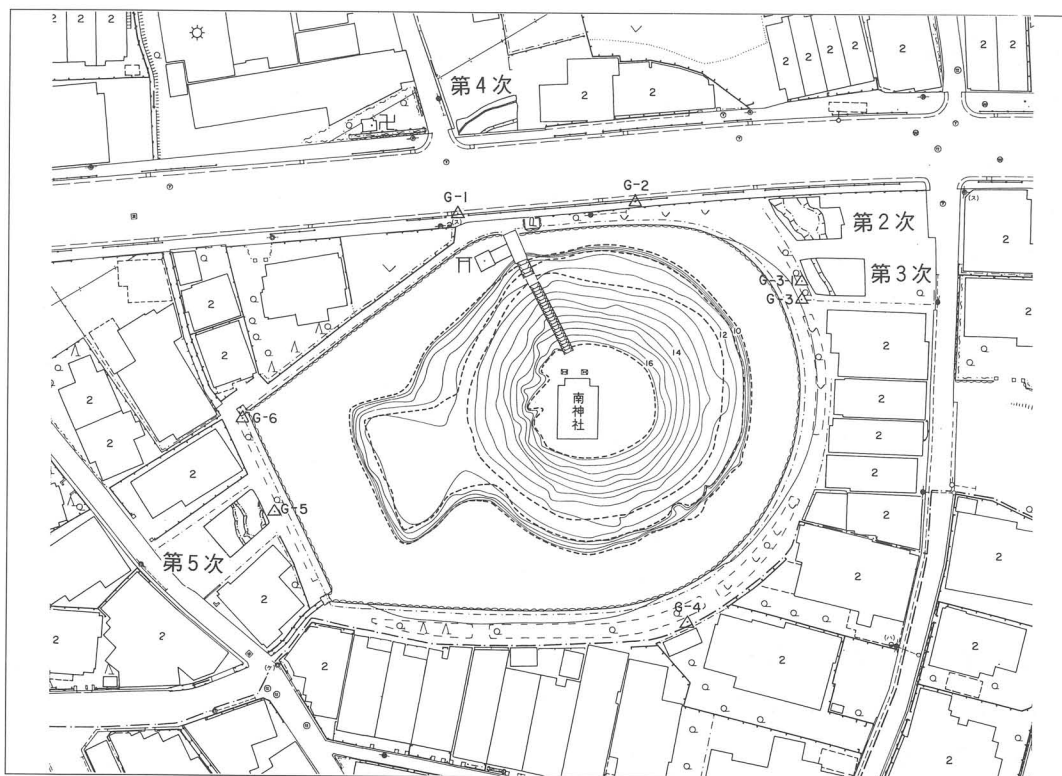


図20. 御願塚古墳実測図(1/1,000)

上の掘立柱建物跡検出され、第3次調査(昭和62年7月15日～同年9月8日)では、一辺が1mの方形の掘方をもつ大型の掘立柱建物跡、第4次調査(平成3年度)では、6棟の掘立柱建物跡が発見されている。これらの建物跡は、主軸が南北方向よりやや東側に向いていて、時期的には伊丹廃寺と平行するものである。

第5次調査では、溝7条と土坑7基を検出し、建物跡は発見されなかった。溝の方向はこれまでの調査で発見した建物跡の方向と一致する。また、土坑3より、時期のわかるものとして、伊丹廃寺所用の軒丸瓦Ⅱ(波状文縁複弁花文軒丸瓦)の破片が1点出土した。

御願塚古墳第5次調査

発掘調査はこれまでに5回行われている。第1次調査(昭和44年8月25日～昭和45年3月31日)では、周濠復元を目的として実施した環境整備事業に伴った調査で、周濠の外縁部に9箇所のトレンチを入れている。この調査の結果から、外堤部の埴輪列の存在に関しては、「積極的に肯定する徴証は絶無」とある。

第2次～第5次調査はいずれも外堤部で実施した。第2次調査(昭和62年12月14日～12月26日)は古墳の東側で実施した調査である。二重目の周濠が発見され、その規模は幅3.5～4m、深さ30cm、外側の線は一定しない。第3次調査(平成4年1月20日～1月25日)は第2次調査地点の南隣に位置する。周濠の幅5.7m、深さ20～30cmである。第4次調査(平成4年12月11日～12月16日)は古墳の北側に位置し、周濠底が2段に落ちる構造になっていて内側に向けて深くなっている。第5次調査は古墳の西側に位置し、幅3.4～3.8m、第4次調査と同様に、周濠底が2段に落ち、内側に向けて深くなっている。

埴輪はどの地点でも周濠の内側から多く出土した。このことから、外堤部に埴輪列の存在が考えられる。また、第5次調査地点から出土した埴輪は須恵質の円筒埴輪と形象埴輪と考えられる破片が多く出土し、須恵質の円筒埴輪はB種ヨコハケの調整技法で、川西氏の編年によるとⅣ期に相当し、古墳時代中期の後半に入る。これまでの調査で、二重目の周濠が古墳の東から北・西側を巡るということがわかった。今後の南側の調査が待たれる。

註1. 伊丹廃寺跡第1次～第24次調査は、高井悌三郎他「撰津伊丹廃寺跡」伊丹市教育委員会 1966. 3に所収

註2. 伊丹市教育委員会「緑ヶ丘遺跡第3次調査報告書 付伊丹廃寺築地跡の調査」1988. 3

註3. 註1に同じ

註4. 中村浩他「陶邑Ⅲ」大阪府教育委員会 1978. 3

註5. 高井悌三郎他「撰津伊丹廃寺跡 昭和50年度発掘調査概報」伊丹市教育委員会 1976. 3

註6. 村川行弘他「伊丹市緑ヶ丘遺跡」伊丹市教育委員会 1986. 3

註7. 註2に同じ

註8. 兵庫県教育委員会「伊丹市緑ヶ丘遺跡」1992

註9. 高井悌三郎他「御願塚古墳環境整備に伴う発掘調査概報」伊丹市教育委員会 1971. 1

註10. 御願塚古墳第2次～第4次調査は、伊丹市教育委員会「伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ 御願塚古墳外堤部の調査」1993. 3に所収

註11. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第19集

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅲ

1994年3月発行

発行 伊丹市教育委員会生涯学習部
社会教育担当

〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地

TEL (0727) 83-1234

印刷 関西成光株式会社

TEL (06) 462-7501

国指定史跡伊丹廃寺跡

